特238
391

國の謎を!!
支那の天地へ!!

憂國の士の必讀すべき

最近の鮮滿支那の情勢と皇國の將來

陸軍歩兵少佐
蔭山貞吉著

始

再序の光榮

拙著曩に忝くも秩父宮殿下、高松宮殿下、久邇大宮殿下、朝香宮殿下、東久邇宮殿下、山階宮殿下、伏見若宮殿下の台覽を賜ひたるは著者の最も光榮とする所にして茲に各宮殿下に對し奉り謹て拜謝の意を表し奉る。

皇國の興廢此一戰にあり』を回顧すると、如何にも日露戰爭當時の國難が想起せらるるのである、しかし春風の如く平和の裡に徐々に襲ひ來る國難に際しては『皇國の存亡此秋にありと』叫んでも或はあまり介意せぬ人が多かりしを知れぬのである。

然り而して春風も時に烈風人を蓆捲するが如き彼の南京襲擊となり、それ漢口が危い、それ九江が危險、重慶が不穩、それ上海が危殆となつたと傳へられ、辛ふじて各國軍の守備兵やら陸戰隊乃至軍艦で秩序が維持せられ

將に天津北京は愚か滿蒙に迄今にも此魔手が延びんと豫想せらるる現情に於ては我大和民族として安閑として居られなくなつたのである、即支那の研究は何は偖てをき、先づ第一に着手せなければならぬと思ふのである。

されば昭和の、御勅語にも左の如く仰せられてをる。

『今ヤ世局ハ正ニ會通ノ運ニ際シ、人文ハ恰モ更張ノ期ニ膺ル、則チ我國ノ國是ハ、日ニ進ムニ在リ、日ニ新ニスルニ在リ、而シテ博ク中外ノ史ニ徵シ審ニ得失ノ迹ニ鑒ミ……是レ深ク心チ用フヘキ所ナリ。』

即國是ノ伸展の爲には先づ中外の史跡の研究をせよとの仰である、支那の研究は全く此御聖旨に副ひ奉ると思ふのである。

著者此稿を草するに當り最も著意したるは支那の國民性の研究である、故に結論に述ぶる所の軍閥批評就中其分散離合は一に自己を本位とし而して朝に夕を圖れざるの戰亂狀態は實に現在支那の眞相を暴露せるものにして

又能く支那の國民性を表はせるは古今の史跡に照しても明である

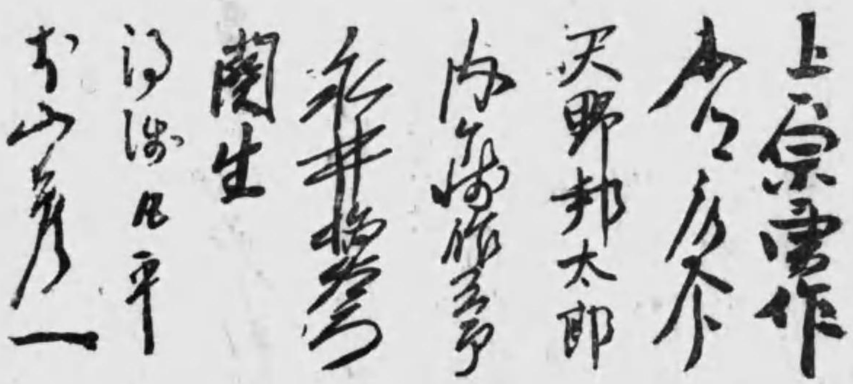
拙著先づ憂國の志士をして先づ支那のアウト、ライン(外郭)換言すれば其概念に通ぜしめたる後次に最も興味ある軍閥の交戰狀態を說明し其豫想を率直に陳述したのである、而して其後の情勢は拙著の豫想に殆ど近邇しつつあるは誠に欣快の念に堪へざる所である、一時天下を風靡せんとした彼の蔣介石が遂に長江に於て一時挫折したのも其內訌を主なる原因とするのである、これが支那の國民性である故に著者の軍閥批評就中此各軍閥に對する對策即皇國の將來（百五十一頁參照）に就ては簡明直截を旨とし最も心血を注いだのである故に讀者は繰り返し讀んでもらいたいのである、而して著者の憂國の至情と又之が對策を諒察せらるる事と信ずる。

拙著發行以來憂國の志士より多大の歡迎を受け版を重ぬること三回に及ぶ而して此憂國の志士中には青年團員あり、在鄕軍人あり、學生あり、敎育

家あり、現役軍人あり又貴衆兩院議員あり天下知名の士あり特に是等の知名の士中には特に余が今回の擧に大に賛同せられ豫期せざる賛辭をさる送られたる方々も頗る多數に上つたのである、今左に其幾分を掲載して感謝の辭に換へる事とする。

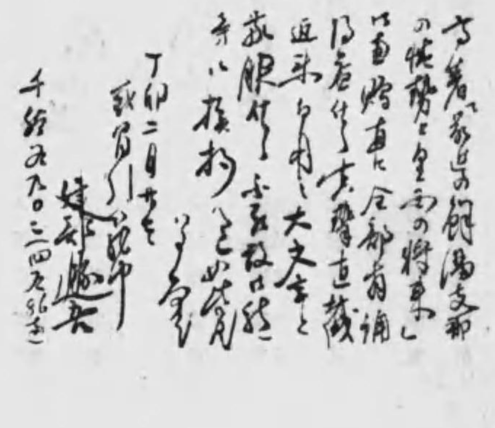
昭和二年丙午の日

陸軍歩兵少佐　陰山貞吉謹白

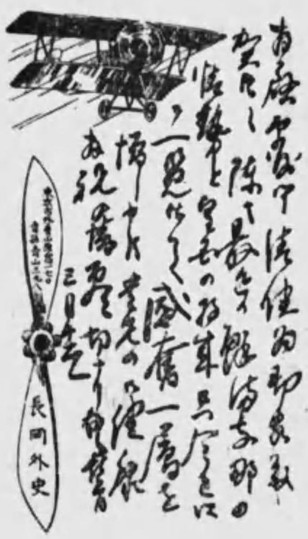


元帥子爵　陸軍大將
久邇宮宮務監督　陸軍大將
陸軍中將
早稲田大學教授　衆議院議員
元外務參與官　早稲田大學教授　衆議院議員
大阪市長　法學博士
衆議院議員
大阪毎日新聞社長　東京日日新聞社長

建部博士書簡
衆議院議員



長岡將軍書簡
衆議院議員



貴族院議員各位

三島弥彦　伯爵、貴族院議員皇室の御姻戚なり
徳富猪一郎　著作界ノ權威、貴族院議員
花井卓蔵　法學博士　貴族院議員
阪谷芳郎　男爵、前大藏大臣　貴族院議員
稲田昌植　男　貴族院議員
[illegible]　前東京市長　貴族院議員
[illegible]　法學博士　貴族院議員
岡村新吉　貿易商　貴族院議員

衆議院議員各位

稲垣平太郎　前衆議院議長
佐々木安五郎　支那蒙古王盟俗稱　衆議院議員
[illegible]　衆議院議員　前兵庫縣知事
井上雅二　衆議院議員　移民興業會社社長
[illegible]　衆議院議員
砂田重政　衆議院議員　農林參與官
[illegible]　衆議院議員
[illegible]　衆議院議員
[illegible]　衆議院議員

動亂支那の天下は北軍（安國軍）に期するか？南軍（國民軍）に期するか？

其鍵は張作霖が握るか、蔣介石が握るか否露西亞か、英、米か果た某國か？

支那の動亂は實に變轉極りがない、本書改訂版の刷行を終つた時恰も、其形勢が急轉直下して來た、故に余は更に筆を加へ最近の興味ある問題即南方軍閥と北方軍閥との比較研究を試みて各位の參考に供するが爲之を拙著の卷頭に加へたのである。

南軍は實に豫想外に北進した、一時は長江の線で內輪喧嘩をやつてをつたが最近又一致の行動をとつた然らば何故彼等は如斯成功を收め得たであろうかとは何人も不審に感ずる事である、故に余は南軍の强味を述べて見ようと思ふのである。先づ『第一』に彼等は北軍に比し精神的訓練が稍熱烈に實行せられてをる即孫文の三民主、主義に加ふるに四海平等の革命精神である、殊に其軍隊の內には少壯熱烈火焰を吐くが如き軍官學校出身士官を配置して而も下級幹部迄徹底せしめて全軍をして革命運動に專念せしむるに妙を得てをるのである。

『第二』に峻嚴（シュンゲン）侵すべからざる罰則と其反面に於て煽動（センドウ）的、激勵的訓示を以て軍規の振作と、精神の統一に重きを置いてをる又戰場に於ては連座（レンザ）法を設け少數の者が自分勝手に退却の出來ぬ樣にしてをる。殊に

戰線の擴大は多種多樣の軍隊の集合となつたから軍司令官の最も信頼する軍隊を以て督戰隊を編成して之を後方要點に配置して態度曖昧の軍隊を嚴重に監視してをる。李生春の軍隊は第一に此槍玉に擧つたのである、此督戰隊は吳佩孚に於ても一時設けた事がある。世界の軍隊にはこんな面白いものはないのである

『第三』に下級將校でも軍官、政治學校卒業の後數ヶ月實戰に參加せしめて其成績に依つて進級させる樣にしてをると同時に上官と雖國民黨規に反する命令を下した場合は絶對に拒否するが如き近代的思想を採用してをる。これが至極民心に投じた處である。

『第四』に民衆の操縱には最も心血を注いでをる即宣傳隊を組織して、或は好辭を以てし或は威嚇し遂に革命を謳歌せざるに至らしめるのである。例へば第八軍長劉文島が長沙に入城した時、標語やら書報の貼付、配布に日夜多忙を極め、或は第七軍長李宗仁夫人の如きは自ら女子宣傳隊を組織して青天白日旗、ポスター等を以て各都市占領後須臾にして其地方民衆を風靡したる如きは其一例である。

『第五』に經濟方面の活動は目醒しきものがあつた即糾察隊を利用し工人會、勞働者を保護し資本家に挑戰し、又は外國貨を排斥し資本を暴力を以て掠奪し又は自己の通貨を强制通用せしめてをる。

『第六』に便衣隊の活動である此部隊は文字に示す如く、支那通常服、背廣服、苦力服、學生服何でも思ひ思ひに便宜な服裝をした特別隊であつて隱密に敵地に侵入して、正服隊の侵入に先つて先づ革命主義の鼓吹、反對重要人物を暗殺するのである。恰も獨逸軍が、白耳義リエージ要塞の攻撃に獨逸の軍人の多數を白耳義の巡査に變裝せしめて同市に入らしめ大成功を收めたのと同一筆法である。

『第七』に南軍は大軍の作戰は下手であるが奇襲は上手である殊に地勢水路を利用する戰鬪に妙を得てをる。即唐生智軍が長沙より洪水を利用して避難民の中に入り急流に棹して葉開鑫軍の背後に迫り之を撃破したのも一例である。恰も奈翁が伊太利ガルタ湖畔に於て夜半湖水を利用して全軍の喇叭手を敵の塊露軍

の背後に廻はし突撃喇叭を吹奏せしめて敵を潰亂せしめたのと同一筆法である。

以上は主として南軍の强味についてのみ述べたが次に南軍の弱味について述べることとする。

『第一』に、南支那方面の人間は元來氣候其他の關係から身體薄弱で、勇氣に乏しいのである寧ろ軍人として適當せないのである。又浙江、江西方面の人間はこれ亦性質怜悧だが柔弱にして剛健性に乏しいのである。只々中支那方面の人間は體格も稍良く性稍慓悍、輕小といふてよいのである。

『第二』に南軍が長江一帶迄進軍し來つた迄は確かに革命の精神が徹底した感がしたがしかし隨分共產かぶれをしてをる、即あまりに過激な革命思想の鼓吹は一時は民衆を煽動利用したりとするも常時苛歛誅求を行はないと遂に其細胞の組織が分解するかも知れぬのである現に楊子江に進んで來たら其箍少々緩んで南京と武漢政府とに別れたのも其著しき例である。

北軍は豫想外に敗北した何人もこれ亦不思議に感ずる一つである。故に余は茲に北軍の弱味を述ぶる事とする。

先づ『第一』に北方軍閥は傳統的に軍閥相互政略的に、私情的に、感情的に行動した所謂集散離合の一團である、即張作霖と吳佩孚及孫傳芳とは嘗て敵味方であり常に其勢力爭をしてをつたのである。

『第二』に此軍閥の下級將校は眼に一丁字もなきものもあり、馬賊上りもあり、風來者もあり制式の學校出身者ほ上級者の小數である、而して上官との間柄は主從、姻戚關係か然らざれば金錢關係であるこれが頗る危しい者である。

『第三』に上官と部下並に全軍を一貫する精神的連繫なく加ふるに其高級者は自ら數名の妻妾を蓄へ戰陣に於てさえ連行するのである。例へば張作霖は七名の妻妾を蓄へ、張宗昌に於ても五月廿日（昭和二年）蚌埠より濟南に退却するに當りても三人の夫人を同行し、幕僚亦夫人と共に退却し、將官は裝甲列車に、佐官は汽車に飛び乘り、大尉以下兵隊に至る數萬の軍隊は徒步にて四十里の道程を一氣に逃げ出したので

ある。其混亂は實に名狀すべからざるものがあつたのである。而して濟南に到着して安全となるや兵隊も天幕生活をなし、之に接するに物賣、乞食も亦花見氣分になつてをるとは實に沙汰の限りに非ずである。

『第四』に北軍は現在支那政府を占領しあるも元來支那の財政は各省長官の手中にあるから安國軍政府と雖此戰亂中各省よりの納付金はなきものと見て可なりである。かく北軍には弱味が相當にある。

然らば北軍には強味がないかといふと決してそうでもない。

『第一』に東三省は物資豊富にして且良好なる根據地を形成し張作霖が永年の間其地盤を作り上げ且一族郎黨比較的多く加ふるに其兵卒の素質朴直、忍耐心に富み馬術に秀でてをり又北支那の兵卒は氣概あり其規律も先づ可なりといふてよい又山東の兵卒は輕薄なるも稍學問がある此等の軍隊は共に共に身體一般に強健にして軍人として比較的良好なる素質を有するのである、しかし支那國民性通有の弱點（一五一頁參照）は敗軍の時に特に表はれてくる。

結　言

之を要するに由來支那軍閥の巨頭の目標は土地と金錢を得るにあるのである故に一度之を得たならば豪奢なる生活をなし妻妾の多くを蓄へ日夜麻雀を行ひ、酒色に耽り而も尙自己の失脚時を慮り租界の外國銀行には莫大の金錢を預金する等用意周到なるものがあるがしかし南軍將校は概して壯年にして粗衣粗食に甘んずる風があるから眞に献身的努力を以て進まば將來は相當有望である。斯く申せば北軍の强味は殆どない樣に觀ゆるがしかしそうでもない其所は日本國と異なり、北方の人間は軍閥がまだ豪奢を極めてもメイフアース、（仕方がない）で承知してくれるから御目出度い處がある。殊に眞に支那軍隊の生命とも稱すべきは寧ろ精神的方面に非ずして第一に金第二に兵器であつて、張郭戰の張の勝利も金と兵器の補充に期すべく南北兩軍共に最も困難とせるは此二者であつて隨つて其攻擊の時期、方法等戰略、戰術的は第二義にして先づ此の財源と兵器彈藥の補充にある事は既に已に歷史の證明せる處である。現に今回北軍は

蔣、唐、馮の首に五十萬元の懸賞をかけたと傳へられてをる若し此金により三者の一人の首を得ば形勢逆轉するのである又山東軍の潰亂も給料の不拂が大原因と稱せられてをる。

又彼の蔣介石に於ても露國の補助を仰がんが爲赤露に對しては、『目下日本に好意を寄する如く見ゆるも某期間日本の邪魔を防ぐが爲になせるものにして、日本に安心させる手段に過ぎず』と唱へてをり又日本に向ひては曰く『目下共產黨と協力せるは一の方便に過ぎず永遠の結合に非ず余は第二のケマル、バシヤ（世界大戰後土耳古を救ひたる偉人なり）なり』と唱へてをる。

即何れが蔣介石の本音たるかは烏の雌雄は本人に非ざれば知る由もなき次第なるも、若し彼にして其共產黨乃至左傾派の操縱、民衆の利用を誤まり且軍の統率力弱くなつた時は果して第二のケマル、バシヤたり得るや、或はケレンスキー（露國革命後最初の大統領なるも革命半ばで失脚せり）の如く失脚するか。所謂ミイラとりがミイラになりはせぬか或は幸運にも成功し得るかは大に疑問とする處にして實に運命の支配する處である。而して張作霖の運命は一に此蔣介石の運命と相反比すべきは其說明を要せざる處であるが就中二者共に其眞の興敗は其背後に活動する露西亞、英、米乃至某國の行動により左右せらるべきは何人も否定し得ざる處であると同時に、其今後の大勢は日々變化する情勢を研究して判斷を下すより外ならぬのである、殊に軍閥の分散離合は一に利害、形勢により變化するからである。

しかし吾人は次の覺悟が必要である吾人は統一なき支那國民の擾亂と露の陰謀とに鑑み東亞の形勢が急轉直下し第二の世界大戰を我眼前に展開せらるべきを覺悟すると同時に從來の如く日支親善の一點張の空想に迷はさるゝことなく又恃み難きを恃み、空しく時日を經過し彼の南京事件や漢口事件の如く我同胞の幾十年の間孜々として得たる其根據を失ふことなく而も支那の何人が勝つも敗くるも關する所に非ず我滿蒙乃至支那一帶の既得權を擁護し得る如く諸準備を周到にし皇國永遠の計に虛隙を生ぜざる如く國家の閣僚並に國民に對し切に望む所である。

著者將に擱筆せんとする時支那の天下の大勢は次の如くである

一、河南の奉天軍、黄河以北に退き、張學良密かに北京に逃れ後圖を畫策し。
二、山東軍に兵變起り殆ど戰はずして徐州を捨て、張宗昌と楊宇霆との軋轢を傳へられ、褚王璞（山東軍前線司令）も亦張宗昌に離反すと聞き。
三、孫傳芳、海州に退き最後に日和見を極め込み。
四、馮玉祥軍と、唐生智軍との連絡完成が出來、愈々閻錫山（山西の督軍にして嘗ては張作霖と共に馮玉祥を攻めたり）は洞ヶ峠を下り南軍に加擔すと稱せられ。
五、田維勤（吳佩孚の部下にして張作霖と共に南軍を攻む）亦寝返りを打ち奉天の危急益々切迫を傳へられ。
五、南軍勝利を得たりと雖北軍の自由退却に依るもの多く隨て尙後方部隊の整頓を行ふて遲々として進まず或は各方面の軍司令官、京、津占領後の勢力分配を夢みつゝあると噂せらるるの時（さらぬ狸の皮算用？）
六、英國は更に北支那に大增兵を行ひ、米、佛、伊亦共に增兵を決行せんとし又公使館の移轉問題起る。
七、日本軍第一次出兵、郷田少將の率ゆる歩兵第三十三旅團大連より青島に上陸し將に濟南に出動の氣勢を示し。而して張作霖表面此出兵に大に反對し內心密かに喜悅せるが如く。
八、一面英、露の國交斷絶し英、露の危急は勿論、奉天軍と露國との緊張を告げ。
九、田中首相、鈴木參謀總長將に第二次の出兵の御裁可を仰ぎ、又對支根本策確立の爲山梨大將渡滿に決す
十、我日本に於て立憲民政黨、革新黨各々新生命に更生せんとし立憲政友會益々黨勢擴張に努むるの秋

昭和二年六月丙寅の日

著者認む

最近の鮮滿支那の情勢と皇國の將來

寫眞說明及附圖、附表、序文目次

寫眞

第壹　最近の著者と其動靜……一
第貳　軍服の著者と陸海軍に對する其抱負……二
第參　朝鮮平壤大同江畔の練光亭と油斷大敵……三
第四　平壤大同江上の遊び舟……四
第五　大邱の市と原始的な市場制……五
第六　撫順炭坑露天掘と其概要……六
第七　鞍山製鐵所の熔鑛爐と我國の鐵……七
第八　蛇蝎と人生……八
第九　萬壽山昆明湖の大理石船（驕る者は久しからず）……九
第拾　北滿の農夫と千里の沃野……一〇
第拾壹　萬里の長城と心の楯……一一
第拾貳　支那の紙幣と高低相場……一二
第拾參　支那の貨幣と換算法……一三
第拾四　支那服の著者と其趣味……一四

附圖

第一　滿鮮支那概見圖（支那軍閥勢力一覽）
第二　撫順炭礦露天堀地層斷面圖

附表

第一　撫順生產の石炭と石油の用途
第二　支那軍閥興亡早見表
序文……一一二

第壹

最近の著者と其動靜

著者は現下の國情特に其政情と思想問題とに鑑み、皇國の將來を憂へ、最近に於ける重要國事の研究に專念し就中隣邦の狀態と我國の人口と食糧問題、農村振興、日米問題、或は國民精神の作興又は國民の政治的自覺、換言すれば國家國民を本位とする政治の淸淨化、實際化、民衆化等の諸問題を提へ各地方の請に應じ無報酬にて出張講演し大に社會の教化事業に努力し遂次多大の効果を收むるを以て唯一の樂となし自ら國士を以て任するものなり。

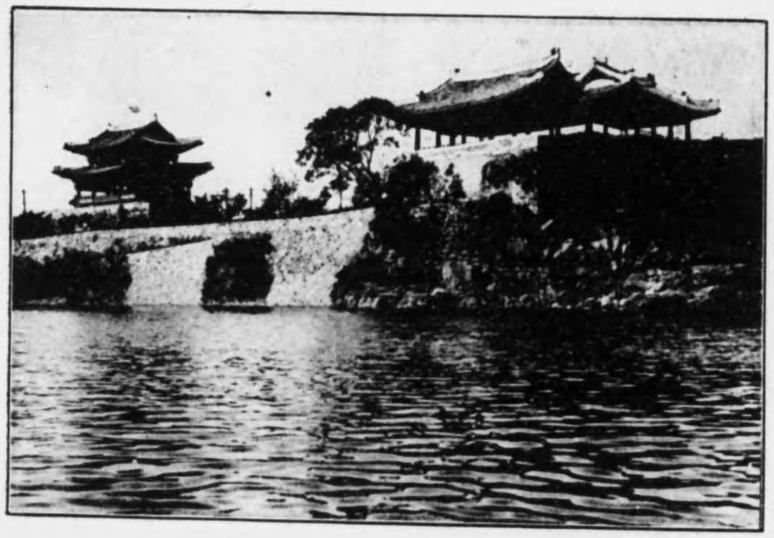
當年　將に四拾歲とす

「軍服の著者と陸海軍に對する其抱負

著者は日露の風雲急なるの秋、姫路師團に生れ、次に滿洲守備に赴き、後主として大阪師團に奉職し、最近大阪歩兵第八聯隊大隊長として在職し、本春退職す、爾後他の方面より、終生國事に奔走せんとす。

職間最も努力苦心したるは、軍隊の民衆化、地方との連繫融和を圖るにありき。而して一面陸軍諸般の事項、就中國防動員業務を徹底的に研究し他の一面に於ては、國防の一半たる帝國海軍の研究に多大の心血を注ぎたり、故に中尉時代より、海軍諸般の大、小演習乃至上陸作戰演習等に屢々參加し、或は各鎮守府を訪問し且巡洋艦、驅逐艦、乃至潜水艦等に逐次乘艦し、最近の太平洋に於る大演習には戰艦扶桑に乘艦し、特に海軍の將來戰の研究をなし親しく忠勇なる海軍々人と勞苦を共にし其眞面目換言すれば命懸の研究に對し大に敬意を表したり。故に著者は帝國陸海軍に關しては既に一隻眼を具有し將來該方面に於ても民間と軍部との中間にありて至公至平の立脚點に於て大に國家に貢獻せんとするものなり。

第　參



朝鮮・平壤・大同江畔の練光亭

油斷大敵

往古文祿の役、小西行長、朝鮮征伐軍の最先鋒として、朝鮮を風靡し、當地に殺到したるも、遂に明將沈惟敬（ミンチンイケイ）に謀（ハカ）られ、此練光亭に會商し、爾後平壤（朝鮮美人の產地、我京都に似たり）妓生（キサン）に耽溺し、將卒共に、滯陣日を久ふし、遂に敗軍の素因を作りしと傳へらる。

若し夫れ行長、斷乎として、明將の言に耳を借（カ）さず、長驅現在の滿洲に殺到したらんには、其大成功を豫期し得べかりしを、事茲に出でず、空しく豐公の雄圖を、畫餅に期せしめしは、頗る遺憾なり。油斷大敵なる哉。

第四

平壤大同江上の遊び舟

❖ ❖ ❖

妓生さんや
黄金を流す舟遊び
（蔭山）

小西行長も如斯美舟にて遊びたるならんか

❖ ❖ ❖

第五

大邱の市

❖ ❖ ❖

原始的な市場制

朝鮮では、尙各著名な都市では、一ヶ月に一、二度市場制が行はれてゐる、此制度は、最も理想的なやり方ではあるが、遺憾ながら、こんなに澤山集合しては、とても理想的の買物は出來ぬのである、又時間のかかる事も夥しい、先づ呑氣なもののやる事であらふと思ふ。早く貨幣の有難味を知る樣にならぬといかぬ。

（第一章三十二頁朝鮮の商業參照）

❖ ❖ ❖

第六

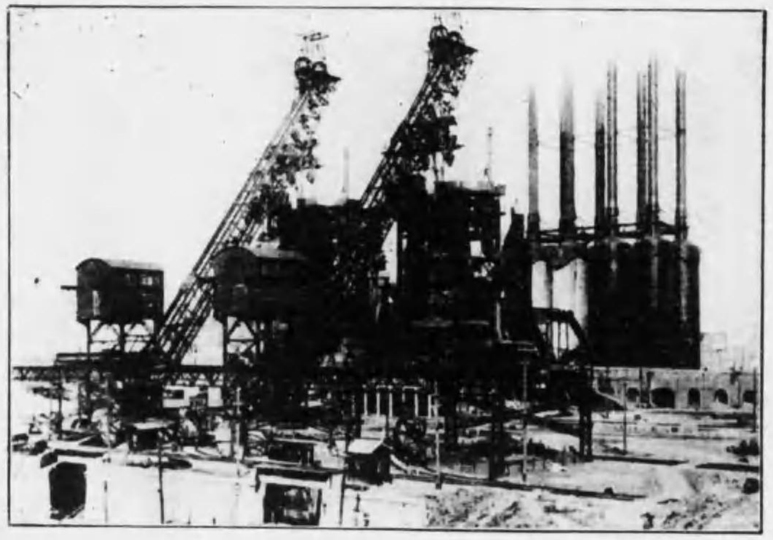
撫順炭坑露天掘

露天掘と撫順炭鑛

露天掘は、其字の示す如く、青天井の野原に於て、恰も土や砂を掘り取る如く、石炭を掘り出すのである。此寫眞を一瞥すれば直ちに其優大なる場面を、想像し得ると思ふ。

抑も撫順炭鑛は、今を距る六百年前に、高麗人により採掘せられ日露戰役により、明治四十年露國極東森林會社より、繼承したものである。其埋炭量は、十億噸と稱せられ、現在一年六百萬噸の採掘量である、故に尙約百五、六十年間は、採掘出來るのである。（第二章八六頁撫順炭鑛參照）

第七

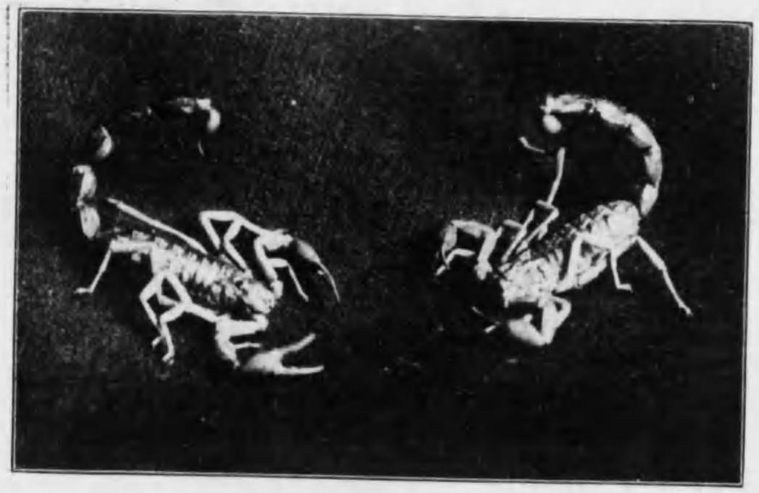


鞍山製鐵所の熔鑛爐

鞍山製鐵所と、我國鐵の自給自足

鐵は工業材料に缺くべからざるものであり、又一國兵器獨立の成否に關するものである、然るに我國では、一年に百萬噸を要するが、五萬噸しか出ないのである。然るに此鞍山では、現在三億噸の鐵鑛があり、今後一年間五十萬噸（現今では、寫眞の如く、二基の熔鑛爐で、一年二十萬噸を造るが、何時にても百萬噸迄擴張し得られるのである）を製鐵しても、約二百年間自給し得るのである。尙當所では、別に選鑛場を設け、一度還元して、磁鐵となし、容易且安價に製鐵が出來るのである。これが他の製鐵所と大に趣を異にせる所である。

第八



蝎(カツ)

❖ ❖ ❖ ❖

蛇蝎(ダカツ)

昔から嫌はれものは、蛇蝎の如くといふが。現物は、此蟲の事である。動物學上蜘蛛(クモ)類に屬(ゾク)し、大きいのは、六寸位のものもあつて、主に石垣の間や、塵芥の間に棲息(セイ)し、夜間出て小蟲を捕へ、尾端の毒鈎(カギ)を以て螫(サシ)殺して食ふのである。

人若し此蟲に螫されると局部腫(ハ)れ上り、一晝夜位は堪(タ)へ切れぬ、痛を感ずるそうである、生命には別條はないが隨分痛いといふ事である。

漢名で蝎(ケツ)と云ひ、日本ではサソリの類である。蛇蝎の樣に嫌はれぬ事が人生の最大要訣であるまいか、呵々(カカ)。

❖ ❖ ❖ ❖

第九

萬壽山昆明(イノイコ)湖の大理石船

萬壽山に遊びたるものは、總てのものが雄大である事と、壯麗を極めてある事には、一驚を呈するのである。此大理石の船は其代表的建築である、日清戰役前支那政府は鎭遠、定遠等と類似の戰鬪艦を更に數艘造る事を決したのである。此時當時の最大權力者たる西大后は、軍艦は造つても、直ちに廢棄(ハイキ)になるが、此萬壽山を大修繕すれば、後世に迄殘ると、言ふて萬壽山に、金を入れたさうである。

實際支那の興亡史を繹(タヅ)ぬると、支那の天下を統一するものは通常邊境の野蠻(バン)人である、然るに此野蠻人が、漸次に華美に流れ人民に重稅を課し、遂に人心を離れ、人民中の不平分子の野蠻な者に亡ぼされるのである、清朝の滅亡も亦かくの如く華美になつたといふ事が、原因なりとは世の定評である。此昆明湖畔の大理石船は、著者も見物して、如何にも前代榮華の記念物と思ひ、水にうつる影さへ淋しく昔を語つて居る樣に思はれたのである。人生過度の驕りは、眞に慎むべき事である。

萬壽山の雄大は、日清戰役敗北の原因となる。
（驕(オゴ)る者は久しからず）

第拾

北滿農夫

沃野千里と農夫

北滿は南滿に比し、頗る豐沃である、序論第一（第二頁の末行）の所謂沃野千里の大陸である。

此一望際涯なき平野は、其處には肥料の必要もなく、ただ天惠の雨露と日光とを待てばよいのである。

此寫眞は種蒔に當つて、掘つた土をおろす農夫である。小供を馬に跨がらせ、自ら馬の口をとつて呑氣そうにやつてゐる處は如何にも農事の單簡なるを表はすもので內地のそれに比較にならぬのである。大陸的の農業の如きはかゝる沃野で始めてやれる事と信ずると同時に吾國民の渡滿を奬むる所以である。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖ ❖ ❖

第壹拾

萬里の長城
（八達嶺附近）

萬里の長城と心の楯

萬里の長城は、甘肅省嘉峪（カコク）關より、直隸省山海關に至る連亘（コー）實に壹千七百餘里に及ぶ城塞である。

城壁の高さ、十五尺乃至三十尺、壁上の廣さ十五尺乃至二十尺、又三百六十尺毎に烽火臺（ノロシ）を設けて居る。

何と申しても、世界第一の建造物である。しかし乍ら如何に立派な城塞でも、防勢的に使用したならば、役に立たず、又心の楯（タテ）を防ぎ得なかつたならば、敵は何れの地點よりも、時機を觀破して、侵入して來るのである、故に吾人は立派な城塞を築くよりも、人の心の楯を破る樣に心懸ねばならぬと思ふ。

第拾貳　支那の紙幣

（一）奉天票（滙兌票）の壹圓

（二）奉天票の十錢

（一）（二）は相場により大に上下す
（一）は目下（大正十五年九月頃）邦貨二十錢に相當す
（二）は二錢に相當す

（三）天津華威銀行の十錢

（三）は銀貨と交換するを以て概して高低少し

第拾參　支那の貨幣

銀貨は民國三年袁世凱之を鑄造す
銅貨は清國時代に鑄造す

大洋（シヤイヨ）の一圓銀貨

小洋（シヤウヨウ）の二十錢銀貨
六枚にて大洋一圓に相當す

小洋（シヤウヨウ）の十錢銀貨
十二枚にて大洋一圓に相當す

二錢銅貨
六枚にて小洋の十錢に相當す

一錢銅貨
十二枚にて小洋の十錢に相當す

大洋の一圓は邦貨一圓五十錢に相當す（大正五年九月頃）

第拾四

支那服の著者と其趣味

著者は、支那觀察時は、國際的なる背廣服を用ひたが、時々支那の趣味を味はんが爲、支那服をも着用した。支那服は、由來邦人には、傳統的に、好まれなかつたが然し此服は我日本服と西洋服との折衷服にして、起居動作自由にして、寧ろ其體裁を論ぜざれば至極便利にして實用的なり。殊に婦人服は、和服に優ること數等である。近時我國に於ても支那服の流行せんとせるは寧ろ慶賀すべき事と思ふのである。讀者諸君試に支那服を着用して支那趣味を味はれんことか。

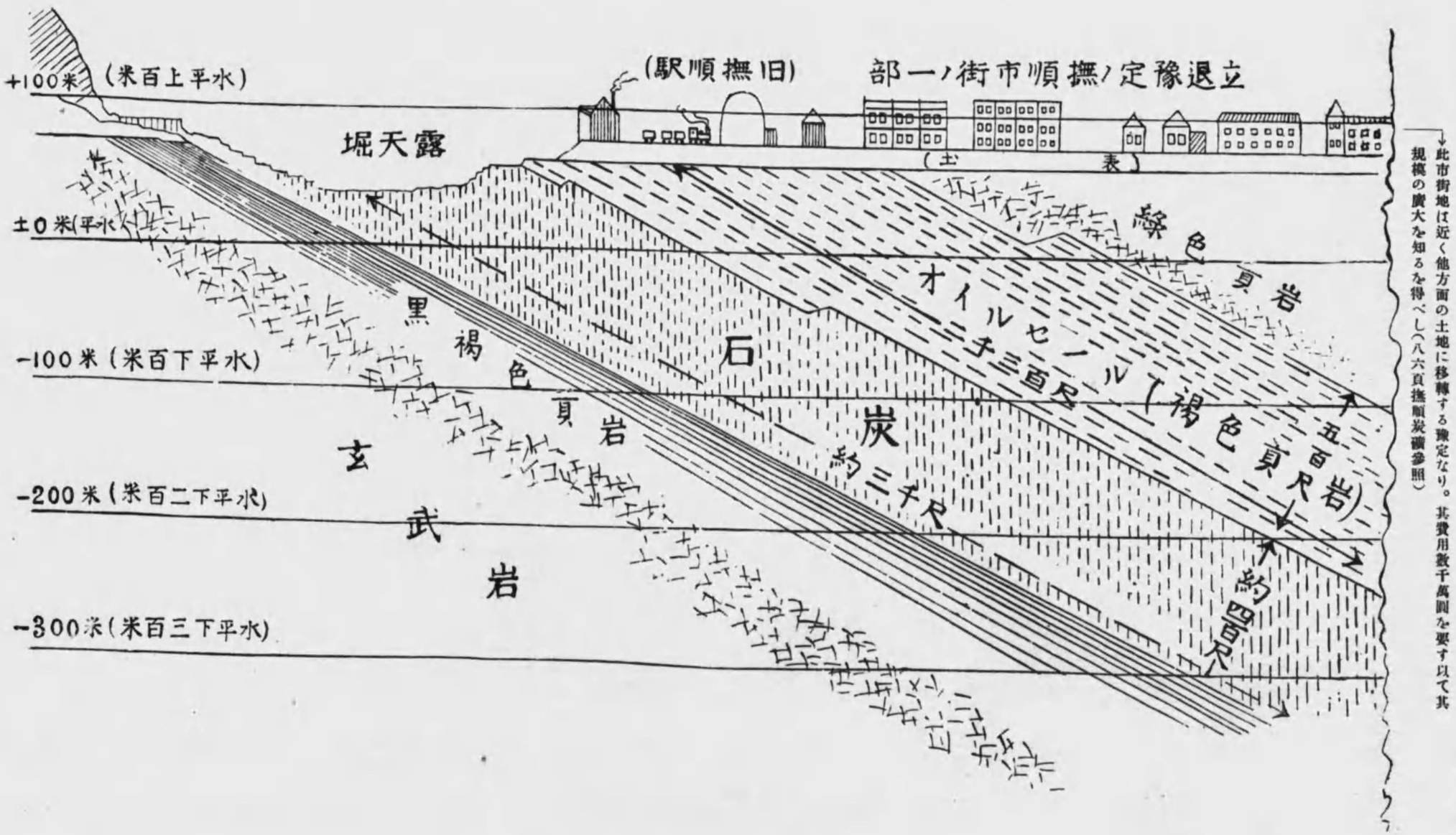
滿·鮮·支那概見圖

（第一圖）　支那軍閥勢力一覽

撫順炭礦

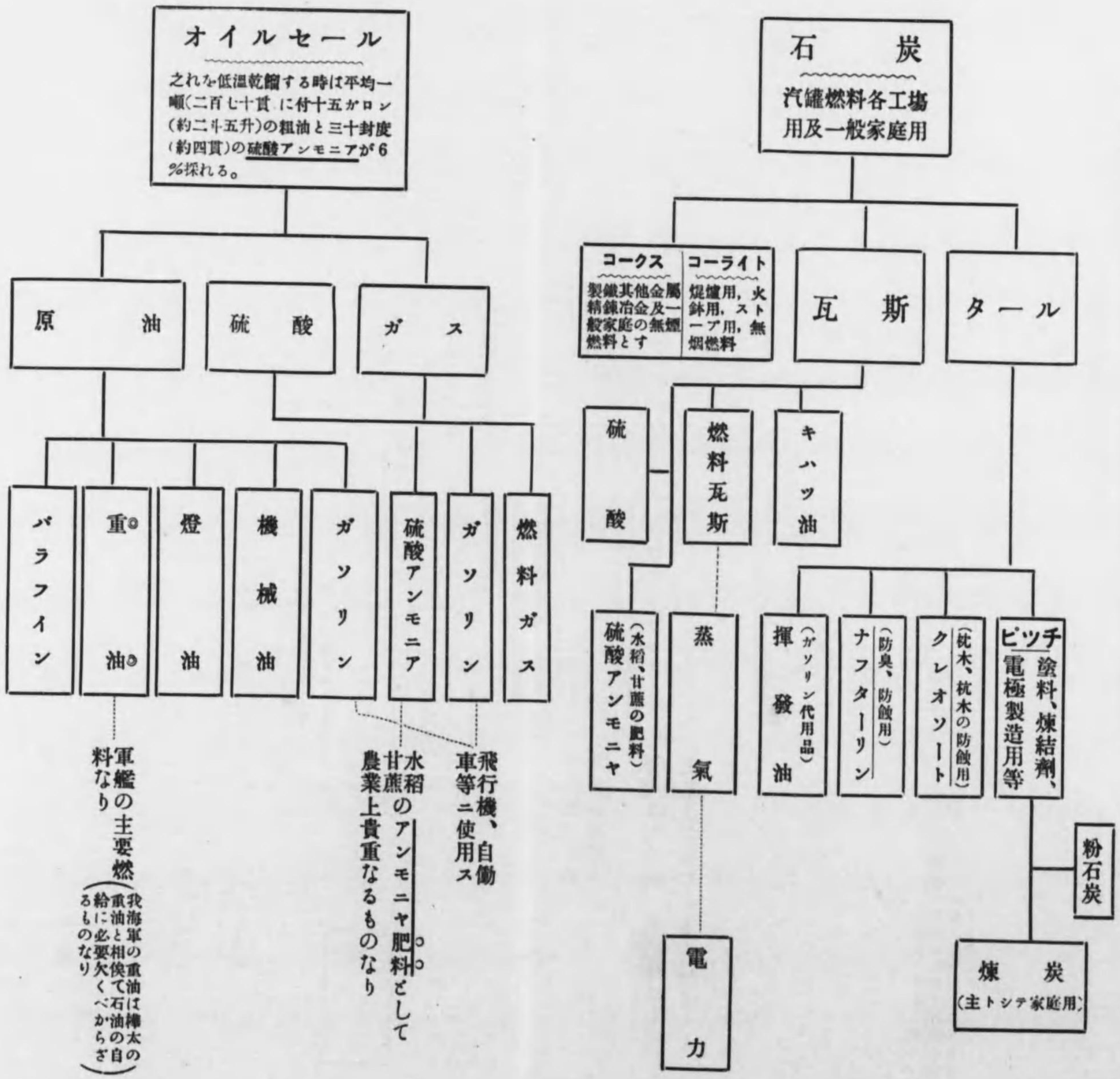
（第二圖）

露天堀地層斷面圖



↓此市街地は近く他方面の土地に移轉する豫定なり。其費用數千萬圓を要す以て其規模の廣大を知るを得べし（八六頁撫順炭礦參照）

◎撫順生産の石炭と石油の用途



(支那軍閥興亡早見表)

第一奉直戰(民國十一年四月)

(吳佩孚) + (馮玉祥) 勝 > 負 (張作霖)……→ 戰遂に敗れ東三省に蟄踞し保境安民の主義に戻る

(張作霖: 北京政府を倒さんとす)

第二奉直戰(民國十三年九月)

初期 (吳佩孚) + (馮玉祥) 勢力相等シ = (張作霖)

終期 (吳佩孚) - (馮玉祥) < (張作霖) + (馮玉祥)

(吳佩孚: 戰敗れて中支那に逃る)
(張作霖: 大に勢力を得て遂に江蘇安徽に手を延す)
(馮玉祥: 暫く張家口以北に蟄踞して機を窺ふ)

關稅會議反對戰

(孫傳芳) + (吳佩孚) + (馮玉祥) > (張作霖)……→ 戰敗れて山東以北に撤退す

(孫傳芳: 五省連合の勢力を以て大に作霖の軍を破る)
(吳佩孚: 遂に勢力を回復す)
(馮玉祥: 遂次勢力を得て北京に侵入す)
(張作霖: 支那の統一を企畫す)

張郭戰(民國十四年十一月)

初期 (郭松齡)+(馮玉祥)+(露國) > (張作霖)……→ 大いに敗北將に危急迫らんとす

(郭松齡: 大いに戰こ勝ち將に奉天を占領せんとす)
(張作霖: 屢々下野を屠明す)

終期 (郭松齡)+(馮玉祥)+(露國) < (張作霖) + (日本出兵)

(郭松齡: 武運拙く斬首となる)
(張作霖: 某國を利用して士氣を鼓舞し戰捷を得)
(日本出兵: 自衛的增兵が寧ろ張作霖を援助した形となる)

赤化討伐戰(民國十五年) (馮玉祥) < (張作霖) + (吳佩孚)

(吳佩孚) + (孫傳芳) + (張作霖) ? 支那の來如何將 (蔣介石)+(馮玉祥)+(露國)

(吳佩孚: 共に英米の援助ありしの噂專なり)
(露國: 大に熱度を加ふ)

序文

熟睡せる眞夜中に警鐘の亂打により、跳ね起きて戸外に出て或は火の見櫓に登つて火の手を觀た時、先づ第一に感ずるものは自分の家に對する安否の程度である、若し火の手が遠く全く類燒の虞少なき時は、一先安心をするが、若し萬一自分の家に飛火でもする樣な情況であると、誰しも血眼となり防火の用意に急ぐものである。國際關係も之と略ぼ同樣で、彼の數千海里を距てた、米國に於て、若し南北戰爭があつたとしても、恰も類燒の虞少なき火災と同樣、我國民にはさまで感動を與へないが、一葦帶水の支那で、最近の樣に戰亂に次ぐに戰亂を以てし、何時我國に飛火するかも知れぬ情況では、防火の用意が緊要である。

況んや張郭戰に於て、若し郭松齡が戰勝を得て、イワノフが東支鐵道の管理を獨占し、カラハンが郭松齡に徹底的に援助を與へ、而も露西亞の滿

蒙政策が益々露骨となり、東三省に於ける我國の特殊利權を蹂躙したならば、我國も増兵どころじやない、内地師團の大動員を行ひ、第二の日露戰爭が惹起して居つたかも知れぬのである、現に郭松齢が將に奉天に迫らんとした時、白川軍司令官は嚴然たる中立を聲明し、又我政府當局者と政友會とは大に意見を異にし、國民も亦出兵と否出兵論を唱へ、議論囂々たるものがあつた、遂に政府は増兵といふ名義で出兵したではないか、實に此間に於ける滿蒙の危機は間髪を容れざるものがあつたのである。

是等の事實は眞に滿蒙支那の研究の必要なる事を説明せるものであらうと思ふのである。又此當時の我國のやり方は、恰も近火に際し周章てて防火に努め、漸くにして近火を消し止めたかの感がするのである。

然り而して、凡て物事は突發してから研究するのでは誠に心細い、斯樣な不安なる隣家、殊に何時何處から火災を起すかも知れぬ大きな家の隣に居住せる吾々は、隣家に大火の起らぬ前に、先づ血眼となり充分に防火の設備をして置く必要があると信ずるのである。

故に余は今回我國民の成るべく多數の人々に、此隣家の研究をして頂きたいと考へ本書を梓にしたのである。されば可成行文を平易にし、事實を可成卒直に表はす事とした、故に青年、在鄕軍人、教育家は勿論の事、會社員といはず、店員といはず、農商工業者其他自治の爲政者、官吏、政治家、現役軍人等あらゆる階級の方々に讀んでもらいたいのである。

幸に各位が本書を手にし、先づ序論により著者の眞意を諒解せられ、續て本論を讀過せられたならば、興味は自ら津々たるものがあると信ずるのである、これにより、我六千萬の同胞、就中其中堅たる人々が、隣國支那並に朝鮮等に大に着眼する樣になり、更に彼地に逐次に活動する樣になつたらば、余の本懷之に過ぎざる處である。

本書は匆卒の際の出版とて、其不備と行文の不整頓とを詫び、且著者と御意見の相異に關しては忠言を賜はらば誠に幸甚である。

大正十五年十月下旬　於新淀川河畔

陸軍歩兵少佐

蔭山貞吉謹白

大阪市西淀川區姫島町

電話（大阪）土佐堀一九二一番（トクニイチバン）

目次

序論

一、滿蒙支那の研究は我國民の義務である……一
二、朝鮮の實情は吾人の諒解を待つもの多し……五
三、余が鮮、滿、支那研究の經路と之が所感を摘錄したる所以……七
四、余が今回の旅程概要と研究方面……一〇
五、余が今回觸接せし方面の主なる人々……一〇

本論

第一章　朝鮮に於ける諸問題

一、朝鮮統治の現在と將來……一五
二、鮮米增殖計畫と食糧問題……二〇
三、朝鮮の產業概觀（農業、鑛業、工業、商業、林業、水產、國境產業）……二六
四、平壤陸軍兵器製造所の民衆化……三五

五、平壤海軍煉炭所と其經營振……三八
六、平壤飛行聯隊の眞價と陸軍飛行行政……四〇
七、內地人の學ぶべき鮮人の美德……四四
八、朝鮮總督官邸の宏大と考慮すべき殖民政策……五〇

第二章　滿蒙の諸問題

一、滿鮮五頭政治の弊害と其將來……五一
二、滿蒙に於ける土地商租問題の現況と將來に對する政策……五八
三、滙兌票（ワイダヒヨウ）と稱する奉天不換紙幣と人民……六七
四、土地買收と官吏軍閥の私腹を肥す手段……七一
五、奉天の兵工廠と其周圍の問題……七三
六、楊宇霆（ヨウウテイ）の力量……七八
七、李景林の失脚と其將來……八二
八、撫順炭鑛とオイルセールは日本燃料の死活問題なり……八六
九、鞍山製鐵所と我國鐵の自給自足の將來……九三

第三章　支那全般に關する諸問題

一、不平等條約の撤廢と實際問題……一〇〇
二、支那人は官吏を官匪と稱す……一〇七
三、支那の軍閥及官吏とはどんな者か……一〇八
四、阿片買買による官吏及軍閥の掠奪行爲……一一〇
五、支那の農民は一般に貧なり……一一一
六、支那兵と靴（雨が降れば戰爭は出來ぬ）……一一三

第四章　結論

一、孫傳芳と英、米並に五省聯合の將來……一一七
二、吳佩孚と英、米並に武、漢の將來……一二一
三、張作霖と日本並に東三省の將來……一二四
四、蔣介石と露西亞並に北伐軍の將來……一三四
五、馮玉祥と露西亞並に其將來……一三七
六、外交官の外交と軍人の外交……一三九

七、支那に於ける軍事顧問……一四四
八、支那の將來に鑑み日本の對策如何……一五一

目次終

憂國の士の必讀すべき

最近の鮮滿支那の情勢と皇國の將來

陸軍歩兵少佐　蔭山貞吉著

序論

國民の義務

一、滿蒙支那の研究は、我國民の義務である。

日露戰爭前後

丹波の大江山と謂はば、誰でもかの鬼の事を思ひ出さずには居られない、更に之を退治した源の頼光やら渡邊の綱などの事を聯想する、今は昔かも知れないが、日露戰爭前後では、滿蒙と謂はば一度でも琵琶歌を聽いた者は『鶯の住むてう滿洲の……』と歌ひたくなり、又兵隊さんに行つた者は『此處は御國の何百里……』といふ樣な軍歌を回想するのは自然である。ましてやか弱い婦女子などは『さぞや滿洲は冷たかろ……』などと云ふ事が先入主となり、今や我國の一般

先入主となる

住みよい處

大豆二千五百萬石

米は二、三百萬石

鐵、石炭、無盡藏

人士の腦裏には、寧ろ滿洲は如何にも無味荒寥な所であり、又殺風景極まる隨分遠い處の樣に印象されてをる傾がある。

乍併現今では、滿蒙にはそんなに恐ろしき驚も居らず、そんなに寒い譯でなく、在留邦人などは誠に住みよい非常によい處であるといふてをる、況んや朝鮮迄は、たつた八時間の航程であり、殘りの陸路は一日であり、海路大連に航するも、僅に二日間で行けるのである。殊に吾々の朝夕の必需品たる、味噌、豆腐の原料の其大豆は、年々二千五百万石を產出し世界全產の六割に當り、粟三千万石、高粱三千六百万石、小麥、麻、煙草、野菜、果物など何でも最も豐富であり、米が年々二、三百万石もとれ、而も年々增加の傾向を示し、殊に工業原料たる、鐵、石炭の多量が內地の需要に缺くべからざるものであり、而も無盡藏であり木材亦然りである。即ち內地の樣な狹くるしい山又山で鼻を突く樣な處は殆どない、所謂沃野千里の大陸で太陽が地平線から

我國の現狀如何

海外發展

白人の跋扈

遠い親類より近い他人

出て地平線に入るのである、然るに我國の現狀如何、曰く人口增加、食糧不足、鐵不足、石炭は僅に數十年に盡んとし、誠に心細く、思想は益々惡化の傾向を示し、近時高等學府の學生に迄瀰漫し其底止する處を知らぬのである、於是心機を一轉して大に海外發展を期せねばならぬ。

然るに世界の最富國たる彼の米國は盛に排日を行ひ、一歩も移住を許さざるのみならず、人口過少で困つて居る濠洲迄も米國に習ひ、今は僅かに地球最南の南米にのみ移住し得るのみである、實に白人の跋扈は將に其極に達せんとしてをる、乍併此の嫌がる白人仲間に割り込むよりも、手近な親類がある、昔から『遠い親類より近い他人』と謂ふ諺がある、しかるに此近い親類の事を忘れては居らなかつたか、忘れぬにしても其研究不充分、其親密の度が足りはしなかつたかと謂はば、何人も此近い親類たる支那の研究、就中滿蒙の研究が足りなかつたといふ

滿蒙は日本の三倍人口二千八百萬

一億五千萬人を移殖し得

事を是認するであらうと思ふ。

此の滿蒙は面積七万四千方里もあり、我が日本の三倍に當るが、人口は僅に二千八百万人位で、我が人口の半分にも足らぬのである、故に單に我國全樣に人を移殖するならば、實に一億五千万人の人間が行ける譯である、此意味に於て、滿蒙の開發は、吾が大和民族の存立上即人口問題、就中食糧問題解決の爲、是非必要である、而して此開發は、中華民國にも大に利益を與ふるから、所謂日華共存共榮上必要なりと謂ひ得るのである、故に我大和民族が、滿蒙の研究、進んでは支那の研究を爲す事は、國民の義務なりといふても敢て過言でない。

朝鮮の實情を諒解

滿蒙の大棧橋

米は内地へ四、五百萬石

平壤の無煙炭

兌換金四百萬圓

人口壹千八百萬人

内地人四十萬人

二、朝鮮の實情は、吾人の諒解を待つもの多し。

支那就中滿蒙を研究せんとする者は先づ、朝鮮の實情を知悉する必要がある、何となれば朝鮮は實に滿蒙、西伯利（シベリヤ）、（西伯利の事は茲に略するが）に對する大棧橋である、此大棧橋は關東州の五、六十倍に當り面積壹万四千方里もあり、我が本州に殆ど匹敵し、臺灣の約六倍もある、殊に其產物は豊富であり、米に至つては壹千五百万石を產し、年々内地に四、五百万石を補充する大切な役目を有してをる、又從來餘り内地人に知れなかつた事は、かの精鋭無比なる我帝國海軍艦艢（カンドウ）數百隻の其原動力の一半は、實に此朝鮮よりして居るのである、即石油を除く石炭の全部其無煙煉炭は平壤附近より搬出せられてをる、又年々日本銀行に兌換（ダカン）準備金として藏せらるゝ金塊約四百万圓も亦朝鮮の金鑛山より掘り出されるのである。然るに朝鮮の人口は、僅かに壹千八百万人、内地人約四十万人にして、内地のそれに較ぶれば、大に開發收容

し得る餘裕がある、而も歴史的關係方面より述ぶるならば、古より最も親密に交通せし國にして、殆ど同族といふてもよい、鮮人又概して溫和にして、短所も隨分あるが長所も多數にある。故に吾人は自ら進んで彼地を踏み、彼の長を採り、短を補ひ、能く其實情に通曉し、所謂唇齒輔車の關係を以て、彼地を視察し、研究し眞に內鮮融合（朝鮮では日鮮融合といふを喜ばぬ、內鮮融合といふのである）の實を擧ぐる必要がある。況んや、

內鮮融合が第一

我　皇室に於かせられては李王家と、御慶事を行はせられたるが如き大御心に鑑み、我臣民としての義務を自覺せねばならぬ、『蒔かぬ種は生えぬ』とは古よりの諺なり、須く心を平にして益々姻戚關係を結び、眞の內鮮融合を圖るべきである、如斯にして漸次に同化して相互の幸福を招來するものと信ずる。

蒔かぬ種は生えぬ

國民精神の振興

自覺心の向上發展

歐洲大戰は民族戰爭

米騷動は聖代の不祥事

農村振興

三、余が鮮滿支那研究の經路と、之が所感を摘錄したる所以。

不肖軍職に在ること貳十有餘年、此間公務の餘暇を利用し、終始皇國の對外關係を研究し、其世界の大勢より、國民精神の振興を圖るべきことを痛感し、而して之が研究を、地方一般人士就中戶主、在鄕軍人、青少年諸氏に鼓吹し、注入し、進んでは一般婦女子、就中主婦、女子青年等に至る迄、之を注入し、其自覺心の向上發展を期するを、唯一の樂みとせり。

然らば着意せし對外問題如何、曰く次の數個の大問題なり。

其一、歐洲戰亂の勃發より、之が終了に至る迄の、歐米諸國の興亡の跡を繹ねて、其民族戰爭の實情を明にすると同時に、皇國に及ぼす影響を論じては、大和民族としての自覺心の必要を說き。

其二、大正七年の米騷動は、實に我國聖代の一大革命にして、而も人口と食糧問題の行詰りを、現實に表はせるを以て、大に農村の振興

日米若し戰はば

熱し易く冷め易き國民性の改良

歐米心醉者多數

を叫び、同時に農村の疲弊は、一面爲政者の罪にありと雖も一面自治向上の精神に乏しきと、其研究心の旺盛ならざる所以を說き。

其三、近時日米の關係は、益々圓滿を缺き、其移民拒絕に至りて高潮し、一時は『日米若し戰はば』の如き國民の意氣を觀、臥薪嘗膽、將來の發奮興隆を豫期せしと雖も、如何せん其意氣は、年を逐ふて消磨しつゝあるは、誠に痛歎に堪へざる處にして、此熱し易く冷め易き國民性を改良して、日米對等の權利を實現せざれば止まざるの精神を力說し。

其四、就中鮮、滿、支那の情勢は、何を措いても先づ研究すべき問題なるに不拘、我國一般人士は、寧ろ歐米心醉者多數にして、小學、中學、大學、皆歐米事情を研究せしむるも、支那方面の研究に至りては、誠に等閑に附せられあるが如き傾向は、眞に國家永遠の計を解決する所以にあらず、小學にも中學にも其教科書中に掲載し大學にても其研

小學、中學教科書に支那事情必要

講演出張五十有八回

速に國民に傳達必要

究講座を設くべき等、大に之が研究の必要を高唱したり。

不肖自ら不顧、其器に非るも、勇を皷して如斯諸問題を提げ、大正三、四年以來年々三、四十回、各地方に出張講演し、近年に至りては其熱度を加へ年々四五十回に及び、本年は八月上旬迄に既に五十有八回を數ふるに至れり。

故に余は最近の滿、鮮、支那の變化を觀察せんと欲し、今回第三回の視察旅行を決行するに至り、其實情を踏査(トウサ)しては、速に之を國民一般に傳達すべき必要を痛感し、不取敢所感の一節を梓(アヅサ)に附するゝことせり。

國家百年の大計上の觀察

四、余が今回の旅程概要と研究方面。

今回の旅行は、八月初旬より九月中旬に至る約壹ケ月有餘にして、主として經濟、外交、軍事、行政等の實況を調査すると同時に、是等の諸機關が果して國家百年の大計に對し、相互の連繫が圓滿に遂行せられあるや否やを觀、努めて實際問題を捉ふるに着意せり、其經路は釜山を振り出しに、朝鮮經由安東を經て、奉天に出て、それより南滿洲を大連に下り、海路天津に到り、北支那に入る、爾後北京に出て、それより天津に歸還し、海路大連經由歸國せり。

各地の長官、土地の代表官吏、民間有力者

五、余が今回觸接せし方面の主なる人々。

余は前述の主旨に基き、努めて各地の長官及其土地の代表官吏、並に民間有力者に接したのである、而も隨分徹底的に所見を開陳し、各位に意見を求めたのである、然るに各地共幸にして終始誠意ある回答を得、且は好意ある饗應を受けし事など、一再にして止まらぬのである、茲に各位の御好意に對して滿腔の謝意を表する次第である。

國家的見地より所見開陳

然れども、余は茲に我國家的見地より、思ひ切つたる私見を開陳せんとするものにして、或は往々各位と意見を異にせるものあるを信ずるが、蓋し止むを得ざる處である、又讀者諸君に對し、一言斷り置かねばならぬ事がある、それは事外交の秘密とか、軍事の機密に屬する事など、並に各發言者の名義を憚るが如き場合は、往々にして生ずるから、乍遺憾多少省略せざるの止むを得ざるに至るのである、所謂讀者各位が如何にも隔靴搔癢の感を抱かるゝ事と信ずるが、此點は豫め諒とせられたい、卽膝を交へてならば、御答へする事が出來る場合もあるが、茲には差控へをする敢て豫め御了承を得て置く次第である。

朝鮮の首腦機關に會見、政務總監、軍司

今左に觸接せし要路の人々の二、三を述べる事とする。

朝鮮に於ては總督府を訪問した、齋藤總督は內地に上京の故を以て湯淺政務總監其他二、三の事務官に接した、又軍司令官邸を訪問し軍

令官、軍參謀長、師團長
朝鮮人李步兵少佐、知事金潤昌氏
平壤の首腦機關に會見
東三省の首腦者に會見
特務機關日下將軍
商業會議所庵谷忱氏
張將軍顧問佐藤顧問
町野顧問

司令官の厚遇を受け、軍司令官森岡將軍、軍參謀長林將軍其他山田、齋藤、松井參謀等に接した　第二十師團司令部では師團長引田將軍及師團參謀長に、又朝鮮步兵隊長李濟楨(朝鮮人の部隊長中最高級の步兵少佐)氏に接した、地方官では平安北道知事金潤昌(朝鮮の人)氏に、平安南道では警察部長伊達四雄氏より厚遇を受け、平壤海軍煉炭所次長木村海軍中佐、平壤造兵所長石井大佐、平壤飛行聯隊長齋藤大佐、平安南道醫院事務官長谷川氏其他十數名の人に接した。

東三省に於ては先づ安東領事西澤氏、副領事大崎氏、及金雨英(朝鮮の人)氏に接した、奉天では特務機關日下將軍、苫米地中佐、奉天商業會議所會頭庵谷忱(イヲリヤ マコト)氏、張將軍顧問では松井顧問、佐藤顧問、(造兵關係の人)濱本顧問、是永顧問(高等用兵關係の人)又滿蒙支那通の松井大佐に接した、町野顧問(步兵大佐にして目下福島縣選出代議士)には日本內地に上京の故を以て、乍遺憾面會の機を得なかつた、しかし此人

奉天總領事吉田茂氏
撫順大山炭鑛長伊東直氏
遼陽師團長長谷川將軍
軍參謀長齋藤將軍
天津首腦者軍司令官高田將軍
總領事有田八郎氏
元大總統黎元洪父子

には本年春東京で數回面會、二、三意見を交換した事がある、又顧問中の老人たる濱面將軍、松井將軍には餘日なく遂に面會の機を失した。

外交官では、總領事吉田茂氏の厚遇を受け、領事三田勝氏、仝蜂谷輝雄氏、又二十數年も在勤し、奉天最古參で、奉天の生字引の尊稱ある阪內書記生にも接した、實に奉天總領事館は支那の檜舞臺(ヒノキブタイ)なるが故に、逸物揃ひであつた。撫順では、大山炭鑛長伊東直氏、炭鑛本部波城氏に接す。遼陽では師團長、長谷川將軍の好遇を受け、參謀長、武藤一彥氏外數氏に接した、又領事館にて代理領事吉井秀雄氏に、旅順では軍司令部の好遇を受け、軍參謀長齋藤將軍及び役山參謀等に接す。

天津にては軍司令官高田將軍の格別なる厚遇を受け、總領事有田八郎氏等の厚意を受く。元大總統黎元洪父子、唐寶鍔(衆議院議員、山東戒嚴參贊)姚震(ヨウシン)(段祺瑞大總統時代の內閣書記官長、司法大臣)氏又天津商業會議所書記長小林氏、軍部では渡(ワタリ)參謀長、湯淺軍高級副官、三

元司法大臣　姚震氏
商業會議所　小林氏
北京首腦者
公使館武官　本庄將軍
代理公使　堀義貴氏
大總統顧問　坂西將軍
奉天軍長　王樹常氏
滿鐵本社顧問　高柳將軍

野參謀、古城步兵隊長等に接す、特に軍司令部上下の日支共存共榮に關する徹底せる方針は誠に敬服に値するものがあつた。

北京では公使館附武官本庄將軍を始め、代理公使堀義貴氏、書記官重光葵（カタス）氏大總統顧問坂西（バンザイ）將軍、鎭威第十六軍、軍長王樹常氏、奉天軍第六方面軍秘書長汪維城氏、大總統府侍從伍連德氏其他多田顧問、小林步兵隊長、華北正報社井上氏等に接す。

歸途、大連に於ては、滿鐵本社を訪問した、當時重役は恰も豫算會議中の故を以て、顧問高柳將軍、後宮、河野顧問等に接す、又地質調査所に藤平田氏、民間では元三菱漢口支店長にして在支那十數年、目下滿蒙に活躍せられつゝある矢橋氏に、又鞍山に於ては醫學博士塚本氏に接したり。

以上を以て、余が觸接せし人々の概要を止むる事とする。

朝鮮の二大潮流
代議參政權問題
漁夫の利
キヤスチングボオート（裁決權）

本論

第一章　朝鮮に於ける諸問題

一、朝鮮統治の現在と將來。

近時朝鮮人就中、中流階級以上に於ては、二大潮流が漲つて居る。卽一は代議參政の權を得んとする運動と、自治政の要求とである。

『鮮人に代議參政の權を與ふべきや否や』此代議參政の權は、鮮人も日本人に相違なき以上、當然與ふべきものなることは、何人も否定する事の出來ぬ問題である。併し其時期の問題が緊要である。然らば之に參政權を與へた場合を考察すると、若し二大政黨が分立した場合の如きは、少數の鮮人代議士の一團は、中間にあつて漁夫の利を占め得る事である、此裁決（キヤスチングボオート）權は、恰も英國に於ける、アイルランド黨が、甲、乙二大政黨の中間に在りて、漁夫の利を占めつつあるが如きは、其適

例である。今一つは、日本の政黨者流が、內爭の爲、遂に朝鮮の統治を重要視せずして、所謂朝鮮の統治の如きは、どうでもよいといふ樣な考を起して、某交換條件の下に、放漫政策をとらぬにも限らぬ事である。何れにしても代議參政の權は與へねばならぬが、其時機は遠き將來に招來するものと肯定せねばならぬ。換言すれば、過早に之を與ふる事は大に考慮を要する點である、卽此時機の觀破は、爲政者の大に研究を要する點である。

放漫政策

『自治政を認むべきや否や』

自治政問題

自治政も、亦彼等鮮人の大に要求せる點である、而して前者に比して可能性の多い問題であるが、若し之を許したる場合、如何といふ事になると、次の樣な事を考へねばならぬ。卽之によりて大に對鮮人關係が融和せらるゝか、或は又彼等の自覺向上心を促進させ得るかといふ點にある、然るに實際の問題になると、彼等の精神を刺激して、寧ろ朝鮮獨立畫策の陰謀などを容易ならしめざるやの、疑の存する處である、何となれば歷史は次の事を證明して居る。

獨立の陰謀

英國と
アイルランド

英國の彼のアイルランドに對する政策の如く、タブリン大學に於て依然ゲーリック語の研究を怠らぬ等、容易に同化し得ざるものである。實際朝鮮統治の、十六年間の、經驗の跡を繹ぬると。鮮人は容易に同化し得ず、といふ歸着點に達する。然らば若し之を與ふるならば、少數內地人の移住に對しては、其足場に非常に脅威を感じ、遂には移住し得ざるに至るのである。故に吾人は今後如何なる手段方法を廻らして、朝鮮統治に臨むべきかといふと、次の樣な結論に到達する。

朝鮮統治の大
方針

東洋永遠の平
和

『朝鮮統治の大方針如何』

朝鮮統治の將來を考ふるには、先づ朝鮮合併の因て來る所以を顧みれば、釋然たるものがある。卽合併の第一要件は如何曰く、東洋永遠の平和、換言すれば我日本帝國の安泰である。滿蒙北支那、露西亞に

鮮人の幸福增進

對する棧橋たらしむるにある。而して其第二要件は如何曰く、鮮人を開發向上せしめて、內鮮融和の實を圖り、彼等の幸福を增進せしむるにある。卽之を約言すれば第一要件と第二要件とは二個の平行線にして、第二要件は第一要件を侵すべからざる點にある、此意味よりして吾人は次の具体案を述ぶる事とする。

朝鮮統治の具体案

『朝鮮統治の具体案』

內鮮無差別

（イ）事の成否を論せず同化主義により邁進すべし、古來人類の結合は絕對的に成功するものに非ず出來るだけ內鮮無差別の實行を主義として行くべきである。

諮問機關の活用

（ロ）出來るだけ多くの鮮人官吏を使用するがよい、又名目だけの諮問機關でなく中樞院其他の機關を、實際的に屢々召集して、諮問に應ぜしむるを得策とする、此點に關しては尙前途遼遠の感がある。

（ハ）朝鮮に對する內地人の移住は安全第一を要する、現在の如く內地の十個師團もある區域に、僅に二個師團の駐屯兵であるから不安を伴ふのである。隨て內地人の移住は奧地には入れぬのである。故に眞に朝鮮奧地の開發を計るが爲には須く適當の機會に、內地師團の一、二個を朝鮮に移轉すべきであると信ずる。況んや現在朝鮮には嘗て朝鮮に駐屯せし在鄕軍人が多數であり、これ等の者が勤務上より自然に朝鮮の風物を愛し、滿期後鄕里より一家を提げて來れるもの尠少ならざるに於てをやである。卽師團を移轉すれば之に伴ひ內地の人口は朝鮮に流れ出て人口と食糧との問題が、同時に解決できるのである。敢て我國民の研究を要望する所以である。

安全第一

內地師團の移轉

十四ヶ年完成
參拾五萬町歩の土地改良
鮮内百十萬町歩

二、鮮米增殖計畫と食糧問題。

此計畫は大正九年に樹立せられたが、豫算の都合に依り、事業遂行に行詰りを生じ、爾來僅かに其一部を施行しつゝ、隱忍時期を待つこと、數年に及んだが、今回齋藤總督及故下岡政務總監等が、職を堵しての盡力に依り時期到來し、愈々其の計畫に更新を加へ、向ふ十二ヶ年（完成は十四年）を期して（一）參拾五萬町歩の土地改良事業と（二）耕種法の改良特に施肥の奬勵とを行ひ、之に要する事業資金三億餘圓を、十五年度以降の政府豫算に、計上するに至つたのである。

其計畫の内容を述ぶるならば。鮮内耕地百五拾萬町歩中、灌漑の便あるは、僅に三十萬町歩にして、其の他は用水の便なく、天水によりつゝあるが如き狀況にして、其の收穫も甚だ不確實であるが、之が爲灌漑改善を計るは、耕種法の先決問題であり、又草生地の開墾、干潟地の干拓等に依り、新に田地となし得べき所甚だ多いから、之等

改善可能八十萬町歩
三億四千萬圓
内地補給八百萬石

の中、改善作業の最も容易なるものゝみを擧ぐるも、約八十萬町歩を算するのである、故に先づ第一期計畫として、向ふ十二年を期し、三十萬町歩の灌漑改善、五萬町歩の開墾、干拓及一般耕地に對する施肥の增加、品種の改良其他耕種法の改良等の事業を併せ行はんとするものである、之が爲所要の經費土地改良の爲、十二年繼續事業として三億圓、耕種法の改善施肥奬勵等の爲、約四千萬圓を計上せるものである。

本計畫により、增殖さるゝ產米は、土地改善事業により約四百八拾萬石、耕種法其他の改良に依り約參百四拾萬石、合計八百貳拾萬石にして、其内鮮内に於ける人口增加に伴ふ需要增加を半額と見込むも、尙且現在より四百萬石以上の移出力を增加し、之に現在の移出額と合して近き將來八百萬石の巨額を内地に供給し得るに至るのである。之を石三十七圓と見込むも約三億圓にして、此半額を以てするも、朝鮮總

此計畫は有望

督府一ヶ年の歳費を充すことが出來る。半島農民の經濟を裕にし、以て各種産業の勃興貿易の旺盛を來し、半島經濟の異常なる發達を期することゝなるのである。

又此計畫は可能性の頗る多い左記理由に依り容易且有望なる事が判る。

（一）朝鮮の氣候土質は米作に適す。

（二）朝鮮水田の大部は天水田なるも資金を得ば灌漑の設備をなすは比較的容易なり。

（三）一般に施肥の觀念乏しく金肥使用の如きは昨今漸く行はるゝに至りたるものにして肥料を施せば增收確實なり。

（四）地價、勞銀、低廉なる爲內地に比し少額の事業費を以て實施することを得べし。

尙本計畫に對する我國食糧問題を考察するならば左の如くである。

內地の米不足六百萬石

杞憂に過きぬ

鮮米改良

內地の米消費額　最近五ヶ年平均　六四〇〇萬石

內地米實收高　仝　五八〇〇萬石

右不足額　仝　六〇〇萬石

で此の不足を補ふ策としては、朝鮮、臺灣等の植民地に於ける、產米の增殖によるの外ないのである。又鮮米八百萬石の流入は、內地產米に一大脅威を與ふるに至るべしとなすものあるも、人口の增加に伴ふ需要の增加著しきを以て、斯る事實を豫想するは、杞憂に過ぎないのである。又鮮米の品質、取引方法等は大に改善せらるゝに至り、一層內地の需要を增加するに至るであらうと信ずる。

又鮮米は從來內地市場に於て、左記の如き事由に依り取引不利なる地位に置かれつゝあつたが、今や當業者の着意により逐次改善せられつゝあるから、將來鮮米の需要は益々增加するものである。卽ち

（一）道內同一等級品にても品質一定せざるものがあつたが、近時檢

軍事上より見た增殖計畫

大正二十九年に八百萬石

査員の素質向上、適切なる檢査勵行に努めて居る。

(二) 石、蝦米、稗の混入多かりしが故に、石拔き作業、籾乾場の改善等を奬勵實施して居る。

(三) 收穫直後一時に賣出の爲、內地市場に殺到し、自ら價格を低下せしめたが、今や農業倉庫の施設改善に着意して、緩急を制して居る。

最後に此鮮米增殖を、軍事上より見るならば、大に必要なるは言を俟たない、卽朝鮮半島に資源地を開拓することは、我國大陸政策の根基をなすものであつて、殊に戰時に於て重大なる關係を有するは勿論、平時に於ても補給上、至大なる影響あるのである。

以上の理由に依り、今期計畫が實行せられたならば、大正二十九年には從來の總收穫約一千五百萬石(內約四百萬石移出し得)に、加ふるに約八百萬石(內約四百萬石を移出し得)を、增殖し得るのである。故に總計百萬石の米が、內地に流れ入るのである、又之が爲鮮內に、三億

第二、第三增殖計畫が必要

圓餘の資金が得られるから、今後此資金により更に第二期、第三期の增殖計畫を決行したならば次の二、三十年も、鮮米により自給し得る事となるのである。

是等の點に關しては、我國民としては大に研究に値する事と信ずる。

朝鮮の農業人口の八割

拾參億圓

作付面積參百七十萬町歩

三、朝鮮の産業概觀。

1　朝鮮の農業

朝鮮の産業は、先づ第一に農業を數へねばならぬ。卽總人口の八割(戶數二百七十万、人口一千四百五十万人)が之に從事し、農産品の生産年額は、産業總生産額約十六億の八割約十三億に當り、其輸出額は總輸出の約七割を占めて居る、しかし農業殊に米の事に就ては已に述べたから茲には略する事とする。

而して雜穀中、米以外の食用作物中、普通作物に屬するものは、麥、粟、豆及薯(イモ)類等にして、此等作物の作付面積は、田に於て大約三百五十五万町歩、水田の裏作として二十万町歩、總計三百七十万町歩にして耕地總面積、四百五十餘万町歩の八割三歩に當るを以て、此等作物の改良增殖を圖るのは、朝鮮の國家經濟を豐ならしめ、且朝鮮農業の振興を圖る上に極めて肝要である。

大豆

貳千五百萬圓

麥

粟は常食

輸入壹千九百萬圓

甘藷は食用

(一)『大豆』は品質收量共に佳良にして、各道到る處に栽培せられ殊に西北鮮には優良品を産し內地及滿洲種に比較すれば蛋白質に富めるを以て、豆腐、味噌、醬油等の原料として貴ばれてゐる、大正十三年中に於ける輸出額は百四十万三千石其價格二千五百二十萬圓に達し、米と共に重要輸出品に屬して居る。

(二)『麥』は大麥、小麥を主として裸麥を併せて到る處に栽培せられてをる、小麥は近年生活程度の向上に因り、鮮內消費額益々增加するも、猶ほ米、大豆に次ぐ重要移、輸出品である。

(三)『粟』は西北鮮地方に於ける主要畑作物であつて、重要なる該地方の常食として、其栽培古來より盛に行はれて居るが、未だ鮮內の需要を充すに足らず、滿洲から仰いで居る次第で、大正十三年に於ては百三十万五千石、其の價額一千九百萬圓の輸入を見たのである。

(四)『甘藷』は南鮮地方に多く栽培せられ農家の補食用として嗜好せ

馬鈴薯

られて居る。

（五）『馬鈴薯』は北鮮地方に多く生産し、品質佳良なるものがある。其の栽培年々増加し、甘藷と共に農家食糧の補給に充てられてをる。

棉が第一

（六）特種農産物としては棉を第一とする、即朝鮮に於て初めて棉花の栽培せられしは、十四世紀の中頃にして、爾來逐年作付増加し大正元年には約五萬町歩に達し、同元年總督府に於ては、棉作奬勵の必要を認め、向ふ七ヶ年を第一期とし、約十萬町歩の作付反別増加の計畫を立案し、略ぼ其目的を達したから更に大正八年より、向ふ十ヶ年の第二期計畫を立案し、既往の面積と合せ總作付面積を、二十五萬町歩とし大約實棉二億五千萬斤の收穫を得、將來更に擴張の餘地ある場合は、此の計畫終了後に於て行ふこととして居る。尙栽培法の改良・生産物の處理に付きても、之が改良の途を講じ、以て棉作改良の實を擧げんとしてをる。

養蠶

（七）『養蠶』は始政以來研究奬勵し、日本、支那の交配種と日本種の二種類を用ひ産額約二十五萬石、長野縣一縣の八十萬石に比すれば及ばざること遠いが、將來は農家の副業として充分である、十四年度より三十萬圓の補助金を投じ十五ヶ年後には百萬石に達せしむる計畫である。

朝鮮の製絲は、器械に依らず專ら人力によつてをる、機業家は將來を囑望（シヨクモー）し、近來鐘紡は京城に工場を設立したから、他の工場も逐次出來る事になるだろうと信ずる。

製糖

（八）『製糖』甜菜（カンサイ）は、明治三十九年來勸業模範場並道種苗場に於て試驗の結果、西鮮地方の風土に適するを認められ、大正八年大日本製糖會社は、平壤に製糖工場を設置して、同九年より製糖作業を開始し、同十三年には平南、黃海兩道に亘り、大約八百二十町歩に、原料甜菜を栽培して居る、多少有望である。現に余も平安南道の栽

朝鮮牛百六十萬頭

陸軍でも革具製造

鑛業は頗る有望

壹千七百萬圓

培を見て、大に喜んだ次第である。

（九）『朝鮮牛』其頭數は百六十萬頭、內地の百四十萬頭に比し、多產にして肉質も佳良であるから、外國種を入れず、原種牛の生產部落五ケ所を定め、朝鮮種の純良なる種を得ることに努めて居る。大正十三年度に於ける、生牛の移、輸出額六萬一千餘頭、牛皮の輸出額二百七十萬圓に達する、最も囑目すべき生產である。陸軍の造兵廠でも朝鮮では革具の製造を多量にやつて居る樣子を見受けた。

2　朝鮮の鑛業

朝鮮に於ける主要鑛物は、金、鐵、黑鉛、石炭等であつて、銅、亞鉛、タングステン等之に亞ぐのである。尙石炭の埋藏量は、平壤附近の無煙炭三億噸、咸鏡南北道の褐炭は約五億噸と稱せられて居る。大正十二年に於ける鑛產全額は千七百餘萬圓（大正七年に於ては三千萬圓）に達して頗る有望である。

工業の不振

貿易五億圓

3　朝鮮の工業

朝鮮に於ける工業は、頗る不振の狀態である、今猶家庭工業其の大部分を占め、大工場は數ふるに過ぎない、卽ち釜山紡績、京城紡績、大日本製糖、小野田セメント會社等之である。

最近鮮內の、自給自足の氣運進み、ビール會社、製粉會社、鐘紡工場等設立せられ絹絲、織物原料、農漁產工場等逐次增加して居る。

貿易額五億餘圓、其約二千万圓は輸入超過にして其の多くは原料品を輸出し加工品を輸入せる狀態である、而して之が調節の爲には工業を益々作興する必要がある。

工業が將來立ち得るや否やは問題なるも、加工品の原料を有し、勞銀低廉なるを以て、借すに時日を以てしたならば、相當有望である。鮮人が勞働者、職工として適當なるや否やと、金利の高き（低利と雖も一割又は一割一分）は、一の懸案なるも、千七百万の民衆を、工業

鮮人の工業的勞働教育必要

的勞働に堪へ得る如く導くを急務とする。而して鮮人職工を、一時內地の工場に送りて、之を教養して鮮內に使用するは、一案であるが、由來鮮人は、役人を好み、進んで工業に働くを厭ふ（例へば中央試驗場、工業學校卒業者の如きも、養成の目的は民間に働く有爲の材の養成であるに拘らはず、教員又は技師になりたいと云ふ者が多い）風習があるから、先之を產業的に教育することが必要である。殆ど日本人が日露戰前後迄は、官吏、軍人等になりたがつたが最近は實業家たらんとするものの增加したと同樣、尙舊套を脫せぬのである。故に總督府では產業奬勵の時機として大に之に力を用ひて居る。

商業は尙原始的

4　朝鮮の商業

市場制は商業機關として全鮮津々、浦々に行き渉り、製作者より直接需用者に渡す、最も經濟組織の進步した又原始的なるやり方であるが一面亦之れが商業不振の因をなし又工業の發達を阻害して居る。

林業　壹千六百萬町步

水產　五千二百萬圓

國境の產業

對支貿易一億七、八千萬圓

5　朝鮮の林業

林野面積一千六百万町步、成林地は僅に三分の一に止る、目下林業試驗場を設け養苗に關する研究を行ふてゐる（朝鮮五葉、唐松の如きは好成績である）

6　朝鮮の水產

水產は漸次發達の域に進み、大正十三年度に於ては水產業者（漁業、養殖、製造）の漁獲高五千二百万圓、製造高三千二百万圓に達してをる。

7　滿鮮の國境方面の產業開發が緊要である

朝鮮は滿蒙の大棧橋であるから、產業も其點に着眼することが緊要である、此の見地より南鮮は放任するも自然に發展するから、國境外に經濟的に進入すること必要である。間島には七八十万人の鮮人が經濟的に推進してをる、又五億二、三千万圓の輸出入中一億七、八千万圓は對支貿易であつて、朝鮮が支那に負ふ處は頗る多大である、故に支

那方面への經濟的發展に就ては支那の勞働者と鮮内勞働者とは到底匹敵すること出來ないから、此點に付研究奮發する所がなくてはならぬと思ふ。

唯一の造兵廠

平時的價値と戰時的價値

四、平壤、陸軍兵器製造所の民衆化

平壤には、朝鮮唯一の造兵廠がある、これを兵器製造所といふてをる、其内容の明細は、只今茲に述ぶる事を憚るが、差支なき程度につき研究して見る事とする、此製造所は、内地の造兵廠と異なり、東京と大阪と熱田と三ケ所の造兵廠を一つに纒(マト)めた至極便利な造兵廠であるから、其平時的價値を述ぶるならば、朝鮮に駐屯せる陸軍の兵器の製造もやるが、修理もやる、又飛行機の修理をもやるのである。平時の製造は誠に寥々(リヨウリヨウ)たるものであるが、併し戰時になると如何といふに余の見聞した範圍では所要に應じ隨分擴張せられ得る準備、卽設備のある事を確信する、平時に於ては目下活動せる工場は二、三の棟(むね)であり。而も其職工數も僅々三、四百名を超えざる範圍らしく考へるが、戰時には少なくとも七八千に近い職工を活動せしめ得る事と信ぜられる、況んや其職工官舍の整備、並に將來擴張の地域の自由なるは到底

民間の仕事

陸軍も大工場を遊ばすな

内地の造兵廠の、行き詰りと比較にならぬ程である。

此の工場の現在の價値は、三、四千萬圓見當と認められてをる。殊に此の工場で、最も愉快に感じたるは、平時に於ては努めて民間の仕事を引受けて居る事である。所長、石井氏は此點に大に留意せられありと聞く、小生の參觀した八月中旬に於ても、已に民間の獵銃二百挺の注文を引き受けてあつた事である。殊に此朝鮮では、石炭の採掘、其他の鑛業が可なり盛であるから將來土工器具などを、請負ふ如きも一案である、卽勞銀の安い鮮人職工を使用して、安價に器具を造れるからである、しかし茲に陸軍には隨分七面倒な、諸規則があつて、極一部のものゝ外は、民間の事業を請負ふ能はざる事である、しかし之を國家的經濟的の見地から考ふるならば、陸軍も平時に於ては、斯樣な立派な大工場を殆ど遊ばさないで、どしどし民間の事業を請負ふといふ樣にしたならば、軍費を捻出(ネンシユツ)する事が出來ると思ふ、かくする事が決して誤りでないと信ずる、卽朝鮮は勿論、進んで東三省方面迄の兵器器械器具(兵器は國際條約上少々憚るが)をも請負ふて然るべしと考ふるのである。卽性質は少々違ふが、海軍の工廠では、隨分民間事業も請負ふ事もある、現に平壤の海軍練炭所は二割の力で民間の便宜を計つてをる、敢て陸軍當局者の考慮を煩す次第である。

五、平壤海軍煉炭所と其經營振

現今朝鮮に於て使用する燃料は主として、重油と石炭とであり、而して其石炭は無煙炭である、此の無煙炭が、主として此の朝鮮から採掘されると云ふ事は、あまり人口に膾炙(カイシヤ)して居らぬと思ふ、然るに此我海軍唯一の、無煙炭採掘所が平壤近郊の寺洞といふ處にあるのである。

平壤の無煙炭

元來石炭は、此の平壤を中心として、約十里四方に埋藏せられ、其埋藏總量約三億噸にして、海軍の現に採炭せるものは、此寺洞附近約二三千万噸見當のものである、此所では、現今年々約二百萬噸の採炭を行ふて居るのである、其埋藏の豐當なるは、誠に一驚を呈する程である。

埋藏量三億噸

採掘も頗る容易である、是等の石炭の約八割は、鎭南浦より、海路德山の煉炭所に、殘りの二割は、當所で煉炭せられ民間に拂ひ下ぐるのである、故に家庭では平壤は勿論京城附近でも、冬期は安價なる無煙炭を使用し得られるのである。

二割は民間に拂下

工夫の勞銀

當所に、日々使用する工夫は、約二千五百人、勞銀は內地人約二圓、鮮人、支那人五十錢を普通とし、定傭鮮人は九十錢見當である、卽勞銀の低きは　實に天與の利と云はねばならぬ此の鮮人、支那人工夫は隨分不潔にて洗はぬから殆ど全部の者が顏迄眞黑である。

以上の外に朝鮮には、尙無煙炭の埋藏せる處は所々にある、例へば平安南道、泉洞附近咸鏡南道黑川附近にありて是等を合すると約五億屯、又咸鏡北道一帶には褐炭は殆ど無盡藏である、如何に朝鮮の石炭が有望なるかを窺知(キチ)するに足るのである。

飛行聯隊

唯一の第一線に立つ攻防偵察機關

聯隊の編成

六、平壤飛行聯隊の眞價と陸軍飛行行政

平壤飛行聯隊は實に、我國の滿蒙、北支那乃至勞農露西亞に對して第一線に立つべき唯一の攻防偵察機關である、此所の聯隊長は豪放にして而も濶達如何にも氣持のよい人である、仝氏とは小生在職中參謀旅行などで共に此の飛行戰術を研究したる事があり、又共に寫眞も撮つた事がある、故に至極仲好(コン)といふてもよい。訪問久濶を叙すると共に、當飛行隊の將來の任務について質問を發したが軍事の秘密に關する事は茲に述ふるを憚るが小生の側面觀とでも申すべき此隊の平戰兩時にやりそうな事並に現にやり居る事を述べて見る事とする。第一に當聯隊の編成は、目下偵察二中隊と、飛行材料廠一個である、是れでは、殆ど戰時の任務は勤まりそうもなく、勿論平時の教育も、出來そうでない、しかし茲二、三年の内には、偵察の一中隊が戰鬪の一中隊に變化すると云ふ事である、然らば若干第一線の飛行隊らしくなる、併

陸軍の飛行教育は考慮を要す

人件費と物件費

し爆擊隊の本物がないから何時の時に其能力を發揮し得るかは誠に疑はしい。飛行隊の教育は、目下では何れかといふと、下士卒就中兵卒教育が主となつて居るらしい、しかし余は、寧ろ偵察將校下士の教育が大に緊要に非ざるかと思ふのである、日本の教育令は、まだ〳〵初歩で、幹部の飛行術が主か、兵卒の地上勤務が主か、何れが主要だか解らぬ程度に出來て居り、兵卒教育の檢閲が隨分ある、此點に就ては陸軍全般として大に考慮を要する點である。故に先般陸海軍の飛行隊が小島砲臺の爆擊を行ふた際に、海軍の成績が遙かに良好で、陸軍の成績は御話にならなかつたのも道理である。而も此當時參加の陸軍の飛行將校は陸軍切つての選拔したものであるから、誠に困つたものである、由來陸軍航空方面は、人件費が矢鱈(ヤタラ)に多く、物件費が少ない、然るに海軍は此反對である。飛行機も澤山ないのに頭ばかり大であるのは面白くないと思ふのである。

飛行費貳十萬圓

而して此平壤の飛行隊も、矢張り飛行術の練習に使用すべき費用は頗る少いらしい。朝鮮國境防備の爲、一ヶ月に一、二回は一、二機でも飛ばしたらよいが、費用が一萬圓ばかりもいり、とても飛べないらしい。又今度南滿洲周水子に、飛行場が出來て、其飛行場の開場式に招待せられたと聞いてをるが費用が數萬圓も要するが爲遂に行かなかつたらしい。それもその筈通常一箇の飛行聯隊全部の費用は、二十萬圓程で、八萬圓は器機費で、殘りの十二萬圓では辛ふじて、將校下士の飛行練習と、數度演習に參加し得る丈である。

かく詮じつめると、平壤の飛行隊も其能力に於ては、誠に微々たるを免れない又使用飛行機其物も、普通の偵察用で、奉天往復が關の山長春にでも行けば歸還出來ないといふ次第である。

故に吾人は此飛行聯隊あるが故に、我國北邊の警備安全なりとは斷じ得ない。隨つて大に研究を進めねばならぬ。又陸軍當局者も限りある費用中人件費のみを多くして、役にも立たぬ飛行聯隊を澤山造らずに、今少し飛行聯隊を眞の意義あらしめ得る樣に改良を望む次第である。

航空費の活用が緊要

祖先を尊ぶ

墓祭に祝文

七、內地人の學ぶべき、鮮人の美德

『祖先を尊ぶこと』は非常なるもので、少し教育あるものは自分の祖先は十數代乃至數十代前の者でも皆チャンと其名を記憶してをる、それ故祖先の祭祀は極めて鄭重なものである。祭祀には杞祭といつて祠堂で行ふものと墓祭といて墓地で行ふものとある。祭祀に讀む祭文をも祝文といつてをるが、これは祖先の祭を絕たぬことは吉事であるといふ所から出てをるのである。かゝる祖先崇拜心から墓地をば大切にするのである。朝鮮に來て若し禿赭地に鬱蒼たる綠林を見たならばそれは必ず某一家の墓地と定まつてをる。一族のうちに立身出世した者があると一族總ての名譽であるとなし之を慶び之を誇としてゐるが、それと共に出世した者は一族の者を扶助せねばならぬ義務を負ふのである、そこで見も知らぬものまでが、一族であるといふ關係から賴つて來て庇護を受けやうとする。（これは感心せぬが）そして雙方ともそれを當然の事の樣に考えて居るので、若し然らずして被庇護者を全然取合はない樣な行動に出ると不人情者として一門一族から指彈されることとなるのである。斯樣な譯で同族間の相互扶助といふことは能く行屆いて居る、又單に同族間のみでなく姻戚間に於てもかゝる風習のよく行はれてゐるのは感ずべき事である。

親の權力は絕對的

『親の權力―子の孝養』朝鮮では祖父母、曾祖父母から孫曾孫に至るまで多數の家族が戶主を中心として同一家屋內に居住してゐる。隨つて幾組もの夫婦が同居生活を營んでゐる譯である。これは隱居や別居の制度がないので親元に長く居るためと早婚の關係によるのである。家庭に於ては親たるものが絕對の權力を有つて居て家族の者は無條件の服從を守つてゐるのである。

朝鮮では儒敎の感化が可なり徹底して居る結果、孝の德が最も重んぜられて居る。親を尊敬し、孝養を盡して、其心を安んずることに力

子の孝養は内地人も及ばぬ

旅行、仕官には必ず父母の許諾

食膳に父母に先つて箸をとらぬ、煙草、酒を喫まぬ

める點に於ては、内地人も到底及ばぬ程である。子たるものは日夜孝養に心掛け父母の命令には絶對に服從し、苟も違背してならぬといふことが幼時から深く強く腦裡に刻まれてあるので父母に對する日常の行爲も不時の場合も至れり盡せりである。例へば晨省昏定の禮といつて朝夕必ず丁寧に挨拶を述べ、その出入には送迎の禮を缺かない。子たるものが旅行仕官する場合には先づ父母の許諾を受け外出する時には行先を明にし歸れば必ず之を告げる。父母の命令に口答へしたり反抗したりする樣なことの無いのは勿論。父母の行爲には決して是非を挾まない。だから兩親の蔭口をする樣な者さへも見受けられないのである。

食膳に向つては父母に先つて箸を執らない、父母の食事の終るまでは侍立又は侍坐して行儀を崩すやうなこともない。又父母の前では煙草や酒を絶對に喫飲せない。或時朝鮮人の親子が打揃つて懇意な内地人を訪問した、主人は珍客とばかりに煙草や酒などを出して歡待したが如何に強いても、子息の方は飲みも食いもせないで、非常に迷惑顔であつたと云ふ事を聞いたが、これは飲めないのではなく、又主人へ遠慮したのでもない、實は吾が親へ遠慮したのである。子に娶つた嫁は專ら父母の孝養に勉めるので夫のためといふよりも、寧ろ親のために貰つた樣な觀がある、だから旅行其他の事由で暫く家を空ける樣な場合にも、兩親を殘して夫婦揃つて出掛けることなどは滅多になく、いつも嫁だけは家に殘つて留守役に當るのが例である。若しも不幸にして父母が病に罹らうものならば日夜側を離れず看護に懇切を盡すは勿論、危篤に瀕するやうな場合には自ら指を割いて鮮血を飲ましめるとか、寒中に氷を碎いて鯉を捕つて羞めるとかいふ樣な支那の二十四孝そのまゝの事例が今日も尚乏しくないのである。父母が亡くなると喪に服するが、この喪期の間は自らを罪人と呼んで人に接することを

嫁は寧ろ親の貰つた樣な觀がある

長幼之序は嚴格である

人前に肌を現はさず

避け、外出には布扇及及方笠を用ひて顏を隱すのである。

『長幼之序』總じて年長者老人に對しては、身分が卑くとも相當の敬意を表してゐる、自分の年より倍數以上の人に對しては之を遇すること父の如く、尊長と呼び自らを侍生と稱して居る。又十歳以上の者をば老兄と尊敬し、自らをば小弟と呼んで居る。目上のものゝ前では眼鏡を用ひない。飲酒喫煙をも憚る風がある、併し近來はかうした長幼有序の美風も多少は弛んで來た傾がある。

『肌を現はさず』肌を現はすことは、朝鮮人の最も嫌忌するところである。この點に無頓着な內地人は、そのため朝鮮人からは下賤視されてゐるのである。朝鮮人は單に肌を現はさぬのみならず室內と雖も衣冠を整へて居る、彼の冠は帽子とは全く反對で脫ぐことは非常に失禮となつて居る、だから人を訪ねて愈々歸る段になると、例の冠の緒を正し手袋、襟卷までもつけて、それから『さらば……』と挨拶に及ぶのである。

以上は朝鮮人の美德とも稱すべきものである、多少改良せねばならぬ點もあるが大体に於て學ぶべき點が多い事と信ずる。

宏大な建物

官邸には番人

獨逸殖民政策

八、朝鮮總督府官邸の宏大と考慮すべき殖民政策

京城に於ては、總督府の宏大にして、結構を盡せるは、誠に氣持のよい事と思ふ、又舊光化門を其一側に移轉した事などは、如何にもと首肯する事が出來る。然るに吾人の首肯し得ざる事がある、それは總督の官邸の頗る偉觀を呈して居る事である、而も其官邸には番人が居住して而して總督は他の少さな家に居るのである。曰く下馬評にはあまりに豪壯にして、現在の總督の費用では生活し得ずといふにあるらしい、かゝる事は殖民政策の第一歩を誤れるにあらざるか、蓋し、鮮人乃至外人等に對し其堂々たる威容を示さんとして、却て反對の結果を生ぜしめたのであるらしい。苟も計畫した事ならば、實行するがよい、嘗て彼の青島では總督たる一大佐彼のワルデックが實に堂々たる官邸に居り支那に對し大に獨逸の威信を示したではないか、こんな事などは獨逸殖民政策の一端でも窺へばよい、敢て今後の殖民政策の參考とする。

五頭とは總領事、關東廳、滿鐵、關東軍、朝鮮總督府、

勢力の五分ノ一で接衝

第二章　滿蒙の諸問題

一、滿鮮五頭政治の弊害と商租問題

大正四年日華の條約が締結せられて以來、外交上何か重要案件が締結せられたかと言ふと、全く何等のとりとめたことがない、殊に張作霖氏が日本の外交與し易しとなし、事毎に對等の條約を結ばんとしてをるのである、蓋しこの原因は滿鮮に於ける五頭政治の不統一に對し、上手に付け込むのである、卽ち總領事、關東廳、滿鐵、之に陸軍(關東軍)などが各個各個に各自己に屬することのみに就て、東三省と交渉するからである。殊に面白い事には、朝鮮總督府から所謂三矢外交等により、直接東三省に交渉し得意然としてゐるのである、卽ち是等を稱して五頭政治と言ふのである。されば張作霖氏に影響する範圍は、自然是等の勢力の五分の一となつて接衝するから、彼等は日本の外交與し易し

苦勞がない

恩人に權利を要求

となすのである。況んやかの張作霖氏は勿論彼の外交を與れる人、即ち東三省の外交官は、支那の中にても新しい者のみが多く彼等の或者は、支那の治外法權、即ち領事裁判權の如きは二十一ヶ條で定められたものとさへ思つて居る者があるとの事である。由來支那の南方の者は早くより歐米諸國にいぢめられ、各條約にもよく通曉して居り、其の結果は、先に孫文の如き人物を出したが、東三省の者に至つては、此苦勞が殆どないから條約の研究もあまりせずに、只々我流でやる者が多いのである。譬へば「親の時代に厄介になつた人に對し、その子が何も知らずに其の恩人に向ひ對等の權利を要求するやうなものである」即ちこんな判らず屋に、生溫い五頭外交をやると言ふことは、眞に我國の最大損失である。

この損失は既に大正八年より痛切に感じて居り、當時の滿蒙四頭方面に於ては屢々お話しがあつたのであるが、例の勢力爭ひから人物の

外交の統一は見込が立たぬ

兒玉將軍の

置場所の關係やら、殊に政府に對する豫算の請求の關係其他の必要より、遂に統一せる外交の相談が纏らなかつたのである。

又朝鮮總督は、齋藤大將と言ふ偉大な人を戴いてゐるが故に外務省やら陸軍省や、大藏省、商工省、農林省等の指圖を受けさうにもないましてや總督個人的勢力の偉大に對しては、首相すらも如何ともなし得ないのである。

まあざつと斯う言ふ次第であつて、滿鮮の東三省に對する外交の統一は、當分見込がたゝないのである、誠に皇國のため憂ふべき大問題である。

而して特に人口問題の解決と、東洋永遠の平和のため、速に解決すべき商租問題も、何時になれば、らちがあくかは不明なのである。こんなことでは日本人、即ち內地人、朝鮮人が何時の時期にか滿蒙に於て、居住の安全を期待し得らるゝであらうか、彼の兒玉將軍が日露戰後

二百萬人
十分ノ一ノ二十萬人

外交の底力は國民の輿論

二十年の滿洲は、邦人二百萬人を移殖し得べしと言つたが、今は二百萬人どころぢやない、其十分の一の二十萬人にも足りないのである。

如斯は日露戰爭に於て奮鬪した、我々の先輩やら、當時の偉人の希圖を水泡に歸せしめたるのである。

吾人は緊褌一番、この不統一極る軟弱外交を、大に鞭韃せなければ止まぬのであると同時に、大に國民の研究を進め、而も大に輿論の喚起を欲する次第である。この輿論の喚起は、續いて國民外交となり、東三省官吏の注意心を喚起し、外交の眞の底力を強く響かしむることが出來るのである、而して彼等奉天軍閥乃至官吏は、日本の何人を最も恐れてゐるかと申すと、かの職業上最も利益を受け又は援助を受くるは軍部及滿鐵である、就中軍部には三拜九拜所謂拜み倒しをなし、又は仲介者の顧問軍人等を通して日本軍部の援助を受け、自己の勝手な仕事をするが、日本の得んとする利權並に在留日本人の希望等は、

外交上手と馬鹿正直

交渉は外務省一手
總てを統一せる總督

外務當局の代表者たる總領事又は關東廳又は朝鮮總督府等の話にはて日本の馬鹿正直なところである。是は彼等の外交の上手なところであり、一面り二十一ヶ條がどうの、不平等條約がどうのと言ふ、國民聲援の下に宣傳外交をやり、今日迄十數年間遂に日本をして、容易に手出をせしめなかつたのである。

茲に吾人は日本の軍部當局と外務當局とが能く連絡を保持し、卽ち與ふるものは與え、取るものはとると言ふ方針に依り、交渉は外務省一手に依り斷乎として彼に折衝するか、若は軍事外交其他總てを統一せる、所謂總督を以つて彼に對したならば、十數年間の懸案も須臾にして解決すると信ずるのである。卽ち商租問題其他各總領事館等に渦高く積まれたる是等の諸問題も、彼の張郭戰當時の如き場合にはこの不統一外交を止め、所謂彼に與へるところは與へ讓歩せしむるところ

は讓歩せしめたならば、此困難なる諸問題も、容易に解決し得たものと信ずるのである。

利子をとらぬ道樂息子

然るに出兵の如きは、單に滿鐵沿線の利權擁護の爲に、數十萬金を費し數千の軍隊を出動せしめ、果して得る所幾何なりしやと問はば、餘りに高價なる感がする恰も『道樂息子が己の利害を顧みず、破産せんとする隣人に金を貸し、利子をとらぬ』と同然である、不干涉主義もこゝ迄行けば徹底する、敢て軟弱外交不統一外交に對し警告する次第である。

四頭の融和が必要

此滿蒙の四頭政治（朝鮮總督府を除く四頭とす）に就ては、七月新任の武藤關東軍司令官は、最近第一回の軍情上奏の爲上京の途次、着任後の直感として次の如く語つてをる。

『滿蒙發展上四頭が、共同一致の態度をとる必要あることは勿論で、今少し此機關が融和して行けば、立派に解決すると思ふと直感した。

又在滿邦人の國家觀念の深刻さは、此五頭の善導により如何なる强敵にも拮抗し得ると思ふ、故に一層各官廳の共同一致の必要を痛感した』之れを見ても小生の愚見と同樣、僞らざる告白なる事が判明する

共同一致を痛感

と信ずる。

商業租地

二、滿蒙に於ける土地商租問題の現況と將來に對する政策。

一、商租とは大正四年の日支協約に出て來た文句で商業租地といふ事である。

二、滿蒙に於ける土地の權利を獲得する事は、實に我滿蒙經濟進展上の根幹をなすものである、然るに大正四年五月の日支協約中、此問題は未解決の儘に放棄せられありし爲に、我滿蒙產業發展上著しき障害を來してをる。

日支協約要旨

其日支協約の要旨を述ぶるならば、

『日本國臣民は南滿洲に於て各種商業上の建物を建設する爲又は農業を經營する爲必要なる土地を商租することを得。(協約第二條)』

『日本國臣民がが東部內蒙古に於て、支那國民と合辦により農業及附隨工業の經營を爲さんとするときは　支那國政府は之を承認すべし。(協約第四條)』

附隨條約

又此附隨條約としては

『本文に謂ふ所の商租といふ文字は、三十ヶ年迄の長い期限付で、且無條件にて更新し得べき租借を含むものと諒解すべし』と卽ち商租料を支拂ふ時は三十ヶ年後無條件にて、更に契約を更新する永借地權となるのである。而して右商租に當りては、日支兩國官憲の認承を受くるを要するが、歐洲戰後支那官憲の商租に對する妨害は彌々露骨となり、最近其の極に達して居る。而して民間に於ても條約破棄といふ輿論の虛聲が、漸次高潮し來つたのである。而して我外務當局は事務的交渉を屢々進むるも、所謂文書や口舌の交渉では彼等支那人には一向に利き目なく、特に最近では東三省の官憲は强くなればなる程、益々鼻息が荒くなり、總領事館の言分など殆ど意に介せざるが如き有樣である。

永借地權

而も尙此間北京政府に於ては、商租妨害として、秘密に次の文書を

南滿官憲に配布してをる、誠にけしからぬ事と思ふ、其商租須知（支那人は國土盜賣令と稱す）の要旨次の如し。

國土盜賣令

一、一人で多くの土地を商租せしめず
二、商租土地は他人に轉賣せしむべからず
三、商租期限は三十年を最長とす
四、商租地は土地利用の目的（家屋建築、農業を營むとか）を定め

必要以上土地を商租せしめず

要は商租條約を骨拔とすべき訓令を發し、一面商租契約をせんとする支那人を拘引し、之を監獄に投じ、又は銃殺する故に支那人は之を恐れて土地を賣却せざるに至るのである。然れども一般支那人は土地の賣却を厭ふ風はなく、巧妙なる手段にて土地を賣却し、其の行衛を晦すものさへあるが、しかし此内訓を國土盜賣令と云ふて、非常に恐ろしがつて居るから、目下行きつまりの狀況にあるのである。之が爲日本人は止むを得ず既往五、六年間は支那官吏を買收して、商租を企て、又は支那人の名義を以て實權を握る方法等、諸種の手段方法を講じたるが、いつも結局は經費の多額と手續の繁多なる爲採算がとれないのである。以上の如く商租には困難があるが、尙大に商租の必要ありやといふに、大に必要ありと信ずるものである、今茲に其必要を述べる事とする。

滿蒙の地味は南滿の一部並に東蒙古の一部卽ソーダ地帶と稱する地域の外は實に廣漠たる沃野である、其面積は次の樣である。

東三省及東部蒙古（奉天商業會議所調査）

耕作地	壹千參百參拾萬町歩
未墾地	壹千七百五拾萬町歩

而して日本本國の耕地面積は六百十三萬町歩なるが故に、未墾地に於ても約三倍の面積を有するのである。最も日本の樣に裏作が出來ぬ

未墾地一千七百五十萬町歩（日本の三倍）
日本六百萬町歩

一億二百萬人の人口收容

年々二十萬町歩開墾

事やら、施設の不備から、土地の價値は日本のそれと、遙かに劣つて居るが、現在關東州内の人口密度と、同じ密度の人々を容るゝとせば壹億二千萬の人（我國と同樣ならば壹億五千萬人）を裕に入れる事が出來る。卽現在は人口約二千八百萬人であるから、將來尙壹億二百萬人の人を收容し得る譯である。

故に現在は山東並に南方支那人が年々三、四十萬人宛移住して來るそして年々二十萬町歩の未墾地が開かれて居るのである、實に羨やましき次第である、故に吾人は邦人がどしどし滿蒙に入り其手で早く開墾せねばならぬといふのである。

又支那全般から申すと、支那の總人口は世界の中位であり、北支那以南人口過剩と云ふてもよい狀態であり、東三省のみが過少と謂ひ得るのである。又東三省内で、謂はば長春以南は人口飽和狀態で、其以北は眞に過少といひ得るのである。卽支那の三分ノ二は人口過剩で、

遼東殖民令

吉林開放

三十町歩二百圓

其三分ノ一は過少の狀態にあるのである。偖て今東三省に對する移民狀態を研究するならば、清朝は漢民を征服し、順治十年に至り始めて遼東に殖民令を布いて、遼東半島に殖民せしめた、次で山東の洪水に際しては、松花江以南に至る迄の殖民を許可し、續いて光緒年間吉林を開放したのである。故に此調子で進めば東三省は、段々南方支那人の發展地移住地となるのである、否現になりつゝある。

次に朝鮮人は滿洲に凡そ百萬人居住し、主として水田其他の農業に從事して居るが、所謂小作人にして、利益の大部は支那人に吸ひ取られ、非常に苦んで居る、故に速に商租問題を解決して、所謂自作農民としてやらぬばならぬ。而して其主要農產物は、豆、米、高粱の外棉花、甜菜、麻、煙草、桑等にして、將來頗る有望である。而して此蒙古方面の土地の如きは、約三十町歩百圓乃至二百圓にして、鐵道開通に從ひ十倍乃至百倍に上る例があるが概して頗る安價である。

日本農民の移住

小作爭議の眞因は人口過剩

先づ鮮人を移住

然らば日本農民の移住の適否を考察するに、此生活程度の低い支那人と伍して、今直に競爭し得べしとは信ぜられざるも、此商租問題が解決すれば、日本人は一面地主となり、一面支那農民又は朝鮮人（鮮人は支那人に調和し勞働に適す）をして農耕に從事せしめ、同時に農事の教育をなし、漸を逐ふて日本農民の移住を圖り得べしと思ふのである。況んや最近內地に於ては、小作爭議諸所に起りつゝあるも、畢竟地主、小作人どちらもあまり惡き爲に非ずして、寧ろ耕地面積に比し人口過剩なるが爲に、遂に大爭議が始まるのである。故に日本現在の六百萬町歩の土地の上に、假りに十五度迄の傾斜地を開て、更に二百萬町歩を增加するも六、七百万戸の農家が働き得るに過ぎない、卽二、三千万の人口は、少くも內地で働き得ざるに至るのである。況んや年々八九十万の人口增加の解決には、如何とも致し難き狀態であるから、滿洲に日本農民の多くを移住し得ざるとしても、先づ朝鮮人を大に移住

鮮人は滿洲へ日本人は朝鮮へ

今頃に調査機關

せしむるが一案である。現に朝鮮內地は日本人の移住に伴ひ鮮人の滿洲移住は避け難き實情にして、逐次日本人が其後に移住して行く、これはとりも直さず日本の人口を大に緩和してゆく事になるのである。

如斯滿蒙問題、就中商租問題は緊要なるに拘はらず、大正四年以來實際の運用をなし得ざる狀態にあるのである。此人口問題食糧問題に對する、卽政府の方針は、各省個々別々にして目下政府は此調査機關を作らんとして居る樣な呑氣なもので、軍部は軍部、外交部は外交部といふ風に、各主務省の業務と目的によりて交涉し、其要求も步調も一致せないのである、此步調の整はざるに乘じ、彼東三省の役人が遁辭を適當に運用するのである。卽前項の所見の如く戰國支那の情勢に棹（さを）さゝんが爲、彼等が勝手なる時には軍部に對して百方手段を盡して諒解援助を乞ふと雖も、商租其他の自己の不利益と認むべき樣な外交部の要求には一も應ぜぬのである。誠に痛歎に堪えない次第である。宜

斷乎たる決意

く政府は歩調を一にし斷乎たる決意を以て、彼の要求と我の要求とを彼此案配して、而も一致の歩調を以て對せざれば、百年河清を待つも及ばざるのである。大に政府當路者の猛省を促す所以である。

最近關東廳と滿鐵と協力して、從來の如き滿鐵沿線地帶の農産會社の助成の如きは、枝葉の問題であるとなし、先づ氣候、地質其他根本的調査を完成して、內地資本家に、可能性材料を提供するに決意し、一面實際技術の實驗の爲、關東州內の約二十萬町歩の區域の一部に、

可能性材料の提供

アメリカ式大農法

アメリカ式大農法を實施するの機運を作りつつあるのは、稍慶賀すべきである、余は切に速に之が實現を希望して止まぬのである。

奉天票

發行高は三、四億

日本一圓に對し奉天票は四圓九十錢

三、滙兌票と稱する奉天不換紙幣と人民。

滙兌票は、奉天票である、奉天の通用紙幣である、兌換準備は固より無く、上海爲替が組めるといふ宣傳名目による通貨である、此虛信により無制限に發行せらるゝのである、現在では其發行高は銀行では二億と云ひ、楊宇霆氏は二億三千萬といふてをるが、民間では三億と云ひ或は五億と云ふてをる、しかし元來絕對秘密にせられあるが故に明確に知る由もないが一般に先づ三、四億見當とみてをる。

此紙幣は發行自由であるから、奉直戰以來兵隊の給料や軍需品に支拂はるゝを以て、遂に日本金一圓に對し奉天票四圓九拾錢に下落したのである。蓋し其性質上當然の結果と稱すべきである、殊に甚だしきは滿蒙の特產大豆其他の農產物出廻期には相當の奉天票が入用である此時には軍閥は銀行より無利子の奉天票を借用し、大糧棧（官吏の出資にて成る委託販賣機關）をして買占をなし、之を外國、主として大

奉天票の買上

連より出し、此品物にて金票其他兌換準備ある貨幣と交換する。而して是等確實なる貨幣を貯蓄し置いて農産閑散期となるとき、卽奉天票の多量の流通と濫發により、自然に其價格が低下したる時機に際し、此の安價なる奉天票を、準備せる貨幣を以て買い上ぐるのである。故に百姓は勿論商人と雖も、一時は大に奉天票を手に入れ金持となり喜んで居るが、暫時にして全く貧乏人と變化するのである、此の差額は軍閥の懐中に入り或は軍費となるのである、故に奉天票の下落をやかましく云ふ事は最もの次第である。

奉天邦人損害は二千萬圓
大連六百萬圓

現に今回奉天票の暴落を受けた日本人の損害は、奉天商業會議所では奉天在住邦人の損害は約二千萬圓、大連邦人の損害は約六百萬圓と唱へられて居る、何故なれば次の樣な現象が現はれて居るからである。

（一）支那商民の賣掛金回收不能

（二）我商品需要の減退

戰爭の騰落も投機に利用

（三）商品賣買採算不能

（四）工業勞銀の騰落常なく生產費の採算不能

又軍閥、官吏は戰爭の勝敗により此の奉天票の騰落を利用して投機賣買をやるのである。卽ち奉天軍の戰況は第一に軍閥及官吏の耳に入るから、敗戰の徵あらば直ちに賣り、戰勝の徵あらば之を買占める、此役目は彼等軍閥官吏の御用を承れる兩替商によりて金購（カネモウケ）をするである例へば日本では農林省の役人が米麥の收穫豫想を統計報告し、其發表前に米相場の買賣をすると同樣なものである。故に勝敗何れの場合に於ても、金錢の利得をするのである、所謂奉天票の活殺は、軍閥、官吏の自由自在になるのである。故に今後東三省の發展を企圖せんとするものは、大に此點に留意せねばならぬ。而して若し官吏と關係なき錢莊業者が此の投機に成功すれば、奉天票の不安定は之等の者の罪であると稱して獄に投じ、又は銃殺するのである、一般人民はたまつた

奉天財政の確立

在滿軍人の留意

ものでない、故に奉天財政の根本的解決は貨幣制度の確立と財政整理にあると信ずる。併しこれは日本政府が非常の決心と監視を以てせざれば誠に覺束ないのである、敢て政府當局者の注意を促す所以である。

此の點では日本の在滿軍人などは誠に太平樂なるものである、例へば白川軍司令官でも、下關に上陸の際に不用意に『此奉天票の暴落は、不正商人の業(ワザ)である。』といふたそうだが、在滿の日本商人等は、之により軍人を批難するものが隨分ある次第で、出先の軍人などは在滿邦人などの經濟狀態などにもよく注意を要するのである。然らされば軍部と在滿邦人との間に、大に意志の疎隔を來す事となるのである、噂の儘を述べておく。

豪壯な邸宅

四、土地買收と官吏軍閥の私腹を肥(コヤ)す手段

滿鐵に連綴した鐵道が出來る場合には、官吏特に軍閥は之等の土地を先づ買收する、而して之等土地の値上りを大いに希望する、實際十倍乃至百倍に騰貴せしむる。之れより得たる金錢の一部は豪壯と謂はうか、或は宏大と謂はうか、隨分立派なる邸宅となるのである。かの奉天の商阜地(滿鐵と舊市街との中間地區)の如きは隨分立派なる建物がある。此の殆ど全部が官吏のものである、而して餘積の土地でも非常に高價を唱へ、決して他に賣却せないのである、恐らく何百倍と地價が騰貴したる時に、賣却するのであらうと觀察せられてをる。

此の觀察も決して表面のものでなく實際に彼等は支那の現況を遺憾なく發揮せるものと思つてよいそうである。

近頃撫順炭坑、某支線の停車場及其附近の買收があつた。此の買收には日本人は可なりの若勞を要したとの事である。此の點につきては

手數料

公言を憚るが、實に支那官憲の手數料（コンミッション）には閉口したといふ事である。又洮昂（トウコウ）鐵道（洮南―昂々溪）敷設に當りても、將來自己に莫大なる利益を收め得るに拘はらず、敷設前日本人に對し莫大なるコンミッションを要求したる所などは、頗る現代の某國式を表はしたものといふてをる、何と云ふてもコンミッションは世界の通有か。

張將軍雄飛の原動力

兵工廠は七千萬圓

五、奉天の兵工廠と其周圍の問題

（一）奉天には兵工廠といふものがある、これは我が國の砲兵工廠（現今では造兵廠といふて居る）の樣なものである。丁度東京の造兵廠と大阪の造兵廠とを兼ねたものである、これが奉天軍唯一の兵器製造所であり、張作霖氏の支那四百餘州に雄飛せる大原因をなせる原動力である。

（二）此の兵工廠こそ、第一奉直戰に吳佩孚軍にめちや〳〵にやられて閉口頓首した揚句に、某顧問に願ふて設立の基礎を作つてもらつたものらしい。時は大正の十二年、二千万圓の資財を投じて設立した、それ以來年々一千二百万圓乃至一千五百万圓の投資をしてをるから、最早六千万圓か七千万圓位のものになつて居る。

此工廠があつて始めて郭松齡のあの大軍が編成せられ、而して此大反亂に對し此工廠の殘置品、大砲、小銃といはず、彈藥其他ありと

顧問連に馬上で遭遇

あらゆる物を出して、遂に此大軍に對抗して最後の勝利を得たのである。張作霖氏並に其幕僚は、實に某顧問に對し、其先見の明に感服し衷心深謝してをるといふ事を聞いて居る。

又序ながら述べて置くが、此張郭戰後大砲、小銃、彈藥等の不足と、眞に造兵術の益々緊要無二なる所以を体得したものか、現に本年春三月に、某顧問に引率せられ張作霖氏の幕僚七、八名は日本の造兵廠見學やら、兵器の購入やらに渡日したのである、現に小生も此一行に大阪城内にて不圖も馬上にて遭遇したのである。

(三)　此兵工廠の内部の編成は、絶對秘密にして居るからあまりデリケート(微細な)な事は申兼ねるが、大砲工場と、小銃工場と、彈丸工場との三つが主である、又之れを何式によつて居るかと申すと、日本式と獨逸式(例のクルップ式、モーゼル式)とである。

目下では小銃は勿論、大砲迄も作り得る、彈丸に至つては十五榴彈

實力ある大兵工廠

日本技師を信賴

日本商人は島國根性

藥位迄も作り得ると稱せられてをる。

又最近に至つては小銃どころではない、機關銃や輕機關銃やら、迫擊砲の樣なもの迄も造り得ると稱せられてをる、故に奉天の兵工廠は已に昔日の兵工廠でなく、眞に實力ある大兵工廠であり得ると信ずる。

(四)　而して之を統ぶるに張作霖氏第一の智惠袋たる楊宇霆氏を以てしてをる、其部長には支那の技師將校も居るが、日本人顧問而も錚々たる大技術者四名も居り、尙獨逸人及英國人等合して七、八名も居る、處が近頃は支那人も日本人の誠意に感じたものか近く(明言を憚るが)日本技師のみに任すといふ話である、誠に此點は結構な事である、少くも奉天の兵工廠だけでも日支親善關係が維持されんとして居るのは愉快である、此の兵工廠に關して在滿日本商人に對し、少々苦い事を申して置きたいと思ふ、それはどういふ事かと申すと

同胞の相互扶助が必要

此工廠の擴張の際には、乍遺憾日本の製造物の需要が比較的少なかつた事である、多くも十分の四位の處である、何となれば日本商人は兎角斯樣なる物品の納入に際してはきわどい競爭をやる、相手の惡口をいふ者が多い。卽甲は乙の納入品の缺點を述べ、乙は甲の缺點を述ぶる、然らば少々智惠の廻りの惡い者でも双方の缺點を明瞭に知る事が出來る、此の場合に當り第三者たる外國商人が、更に納入品を持參し來る、此の品は運賃の關係から述べても高價であり、敢て日本商人の納入品に優らざるも、誰も惡口と其缺點を述ぶる者なきが故に遂に合格し、而も高價に購入せらるゝのである。又譬へ外國商人の競爭者のある場合に於ても、彼等は彼此互に意思を疏通し、今回は貴商店次回は我商店にといふ風に、妥協の上手なる點は實に國家的、對國際的であるといふ事である。此の點は吾人等島國に生れたる者は大に覺醒をせなければならぬ點と思考する、切に同

胞商人諸君の御考慮を煩す點である。

（五）　此兵工廠こそ實に奉天票下落の大原因をなさしめたる一である

卽張作霖氏は此兵工廠に多額の金を入れたから、隨分人民を壓迫したのである、之が爲一時は將に民意を離んとした、又漸次に民意を遠ざかりつゝあるかと信ぜられたのである。故に目下の場合に於ては、せめて張郭戰當時に述べたる處の保境安民の政治に則り、これ以上此兵工廠などに財寶を投ぜない事を切望する、然らざれば奉天の財政は遂に破綻を來しはせぬか、敢て張作霖氏並に其幕僚諸君に苦言を呈する所以である。

張將軍の智慧袋

彼の偉大は太腹

六、楊宇霆の力量

楊宇霆氏は何と申しても奉天軍の第一人者であり張作霖氏の智惠袋である。張作霖氏近來の豪勢は、一に彼に待つ所が多い、彼は日本陸軍の教育を受け(日本士官學校の第二十期生にして明治四十一年卒業)歸奉後漸次勢力を得て、最初は軍政方面のみの獻策をして居つたが、第一奉直戰後は、大に政治方面に迄力を得て、他の同僚は勿論其先輩などをも凌駕(リヨウガ)するに至つた、故に先づ郭松齡(カクシヨウレイ)との確執(カクシツ)となり、第二奉直戰では郭軍の進退に關し可なり危險な場面(バメン)を表はした、次で張郭戰の演出となり、奉天省長王永江追ひ出しに成功した。

彼は支那人に似ず偉大なる所は所謂太腹(フトツパラ)である、先づ第一に第一奉直戰後に困難なる財政の整理をなして、張作霖氏に獻策したのは兵工廠の新設である、これは兵器の獨立と同時に奉天軍の精鋭をなさしむる素因を作つたのである。彼は今此兵工廠の提理(ディリ)(廠長)を務め、而も

第二奉直戰の總參謀長

最も眞面目に其作業の進捗其他に鞅掌(オーシヨウ)して居る、此點では支那從來の官吏と趣を異にせりと謂はれて居る。

第二に奉直戰には多くの同僚、先輩に對し總參謀長として張將軍の名に於て、殆ど全軍の指揮をとつた。第三には馮玉祥(ヒヨウギヨクシヨウ)を殆ど徹底的に壓迫した事である。之が爲には吳佩孚(ゴハイフ)と張作霖との提携を畫策した、これは彼の大なる處である。何となれば佩孚といひ作霖といひ殆ど會見すら容易になし得ない、殊に如何なる條件にて聯盟すべきかの術を知らなかつたのである、それも宇霆と、佩孚の懷刀たる張其煌(チヨウキコウ)の二人で下相談をして、續て作霖と佩孚の會見となつたのである。これに依つても彼の奉天軍中の偉大さが判明する。殊に彼の偉大なるを表はしたのは、張郭戰である、當時奉軍の將に潰滅(クワイメツ)せんとするや、奉軍の部將は殆ど顏色なく、政治家は旅順、大連に逃れ、部將中の或者は郭に欵(カン)を通じたものさえ隨分ある、又御大の張作霖も幾度か下野を聲明し、當

日本に亡命

時軍務をとるにあたつても其座に堪へなかつたとも傳へられてゐる。此時に當りても彼は平然として曰く『敗戰するかも知れぬ致方なし、若し止むを得ざれば日本に亡命せんのみと』、如何にも日本の古武士の態度を保持して居り、最後迄左右の者を指揮し（左右の者も半數迄は態度を曖昧にす）殊に外國人には最後の俸給迄も與へたといふ事である。

信望日に加はる

故に張郭戰後の彼の聲望は、奉軍は勿論東三省を壓して居る、財政の牛耳も亦彼が執つて居る、奉天票の發行も自由である。而して兵工廠を管理して居る。殊に彼は奉天省生れの人であるから作霖の信望日に加はるのも當然である。しかし彼には手兵がない、故に作霖には其陰謀等の疑を抱かれない譯である。

以上により彼の力量の概要は了解出來るが、若し作霖にして失脚せんか（老衰か異變か）東三省全般は治め得ずとするも、之に代るべきは宇霆に非ざるやを思はしむる、張學良は餘りに若年にして茲十數年を

齡僅かに四十二

經ざればとても親父には代れまい、故に宇霆をして益々奉天の重鎭たらしむる所以である。

彼頭腦明敏、加ふるに決斷力あり、齡僅かに四十二なり、將來益々多望多幸、眞に東三省の爲更に支那全般の爲自重自愛大に盡す所あれ。

茲に蕪辭（ブジ）を呈して其發展を祈る次第である。

李景林氏の失脚は不審

彼の手兵七師

七、李景林の失脚と其將來

李景林氏が過般突然失脚して、日本に亡命せし事に就ては、何人も大に不審を抱いた處であろうと信ずる、吾人も亦不(スクナカラズ)此問題につき興味を持つたのである、今回是に關し東三省及北支那方面の要路の人、殊に彼と行動を共にせし人達から、親しく其經緯を知るを得たのである、左に其要旨を述べて見よう。

彼の失脚は何と申しても、張郭戰前の天津に於ける態度が禍(ワザワイ)したのかと察せられる、否之は禍でなく幸福かも知れぬが暫く禍として置く、卽ち當時郭松齢の手許には、奉天軍の精鋭十箇師（師とは師團の事なり）があり、國民軍亦二十師に相當する兵力を以て、北京に待機し若し郭に正面より反對せんか、直ちに西面して灤(ラン)州より一擊の許に破碎せらるべく、國民軍に正面衝突せんか彼僅かに七師を以てしては如何ともすべからず、此時に際し國民軍の天津通過を强要せられたのである、所謂四面楚歌(ソカ)の情態にあり、彼は回答の諾否を考慮する正に一週日、實に當時は非常に苦心して碌々食事もせなかつたらしい、彼支那人としては勝算なき戰鬪を敢てなし得ざりし所以である、これ彼が張作霖に二心を抱けるものとして取扱はれんとしたる大原因である。

回答考慮一週日

日本の病院に入院

爾後國民軍の近接するが儘に戰鬪を開始したり、其第一回に於ては作戰機宜に適したりしの故を以て、其先鋒を破りたるも、大兵に對しては攻擊精神乏しき彼等は、荏苒(ジンゼン)數旬遂に國民軍に包圍せられ、天津條約上最も不利の地位にある天津に蟠踞(バンキョ)し、遂に全滅の悲運に遭遇したのである。

爾來彼は作霖、及張宗昌の援助を受け、大勢を挽回し、國民軍を逐ふて北京に入れり、此時吳、張の合縱なり、作霖の來燕に際し面會すべかりしも、遂に果さず、續いて天津に於て學良に面會すべかりしに、忽然急病の故を以て日本病院に入院し約束を果さざりき、是彼が最近

失脚せし近因なり。

北支那の何人も、彼の病氣なる事を肯んするものなし、彼は偉丈夫なり、卽ち今回の入院は所謂支那式の假病といふ病氣なりといふ、蓋し若し學良に面會せんか、萬一面會前に彼の二心ありしを楯にして、捕縛せられんか彼の一生は萬事休すればなり、これ吾人が支那の上下の關係の解すべからざる所以にして、支那軍の亦結束卽ち團結の弱き所以なるべし、又最も具體的なるは彼の入院するや、張宗昌は直ちに其部隊の武裝を解除すると同時に、自己の隷下に編入し直魯聯合軍（直隷、山東の聯合軍なり山東は由來魯州と稱す）と改稱せり、而して上官と部下並に親友相共に何の恥いる處なし、これ亦支那式なり。

作霖には由來良將多けれども、稀に郭の如き大反逆人あり、今又茲に李といふ將軍あり、後者は果して二心ありしや否やは茲に明言を憚るも、失脚の道程と彼の力量とを以てすれば、將來亦風雲の乘ずべき

直魯聯合軍

あらば更に北支那の天地に活躍すべき機會あらんか。

景林失脚すれども、口を糊するに充分なる資金あり、況んや第二奉直戰の戰功にて作霖より一時に四十萬金をさゑ得たることあり、我國の近時『大臣の、死して、殘るは、借金なり』とは同日の論に非ざるべし。

幸に保養健在なれ、更に風雲の到來を待て。

風雲の到來を待て

石油と石炭は食糧と選ふ所は無い

一國の產業は燃料に在り

石炭と石油の用途

八、撫順炭礦とオイルセール（頁岩）は日本燃料の死活問題なり

石油と石炭とは刻下の重要問題である、人間が火食を覺えて以來、燃料程人類生活上に密接の關係を有するものは少くない。

其の貴重なる點に於て敢て食料と選ぶ所は無い、社會文化の向上は一に燃料の發達に伴ふものと謂ひ得る。

牛糞（フン）を焚き（蒙古にて行ふてをる）落葉を拾ふ時代には、未だ文化の萌芽だに認められなかつた、然るに輓近に於ける科學工業の進歩は、凡て之れが原動力たる燃料の力に俟たざるものは無い、一國產業の發達國家の興廢が、懸つて今後の燃料如何に在りと叫ばるゝのも、眞に理の當然である。（此石炭と石油との用途は卷首の第一表に掲載しあり）

燃料問題の解決は、今や國家として一日も閑却す可からざる喫緊事であり、又國民個人として、一般の情勢に鑑み、絶えず之れに關する智識を求め、日常の注意を怠つてはならぬ。

長サ約四里幅約壹里

石炭は十億噸

オイルセールは五十五億噸

今後五、六十年大丈夫

偖撫順の炭礦は、明治四十二年八月日清善隣條約に依り、日本の手に入れるものにして、其礦區は東西約四里、南北約壹里約壹千八百萬坪の地域に、其埋炭量は十億噸と唱へて居る、又重油の原料たるオイルセール（頁岩）は五十五億噸である。

一日の石炭採掘量は約二萬噸にして、一年約六百萬噸である、而して次の樣に賣却せられる、滿洲約二百萬噸、日本內地約百五十萬噸、支那南部及南洋に二百五十萬噸である。故に現在の量ならば約百六十年間採掘し得る譯である。併し年々採掘量は增加するから今後五、六十年位は大丈夫と見てよい、故に吾人はなるべく當地の石炭を採掘し、將に盡きんとせる內地炭なり朝鮮の無煙炭等を保留し置かねばならぬと思ふ

又オイルセールに至りては、石油問題を解決するに誠に喜ばしい事と思ふのである、卽大正八年頃から之より石油を採る事を研究したが相憎收支償はなかつたが最近に至りては6％（パーセント）の石油がとれ、而も若

我海軍の重油は撫順一手

一年の需要五六十萬噸

干の收益が得られる見込が立つたのである。而して我海軍の重油が、殆ど此撫順一手で補給し得る樣になる時機は近く到來するのである。

現に最近我海軍重油の補給は次の如く定つたといふ事である。『即此オイルセールの發見と、北カラフトの重油とで將來の自給方針が定つたから、北アメリカ、サンペトロの重油は明年六月迄で打切られ、南洋ボルネオの重油は十七年度で契約が解除せられるとの事とある。即大體現今我海軍では一年五、六十萬噸の重油が入用であり、戰爭には更に倍加する事と信ずるが、現在ではメキシコ、ジヤワ、ボルネオ乃至アメリカ等から補給を受けて、而も各鎭守府で石油タンクに收藏して居る樣な次第で、誠に心細き感じがして居つたのである。

偖て是等の石炭とオイルセール等は何物から出來たかといふと、太古（第二紀層）渾河（コンガ）の幅廣き所に材木やら動植物などが埋沒して、層をなしたものと推定されて居る。

資金一億二千萬圓

撫順あつての滿鐵

滿洲の勞銀のレベルは六十二錢

支那人思想の惡化と勞働爭議

此炭礦の資金は一億二千萬圓であるが、滿鐵では鐵道に次ぐ儲（モウ）け頭らで、滿鐵全收入に甚大の影響を與ふるのである。夫れも其筈、一噸僅かに一圓八十錢で採掘出來る石炭も大連に行くと十數圓となるのである。即撫順あつての滿鐵といひ得る。然らば何故安價に採掘出來るかと申すと勞銀が低廉（ヤイレン）である。即支那人の勞銀が一日平均七十錢である、而して彼等にしても一日三食の費用は十一錢（會社にて共同炊事）であり、住宅料一ケ月僅かに一圓弱（一日は三錢）、其他衣類を買ひ且少々遊んでも一ケ月九圓程の餘裕を生じ、一年百圓有餘の金を持つて山東（山東省の苦力が大多數なり）に歸還するのである、尙滿洲の勞銀のレベル（平均）は六十二錢であるから、これで勞働爭議の起らぬ譯である、此點に關しては滿鐵は勿論我國の幸福といふてよい。故に我國は支那人の思想が惡化せず、勞働爭議がなき間は、安價な石炭、石油等の補給を受け得る事となるのである。即支那人の思想の惡化、殊に上海

漢口方面の如きに至りては屢々日貨の排斥を受け、經濟上に影響する處、幾何なるやを知らざる狀態である、故に滿洲に於ては、經濟上から見るも、思想の惡化は我思想界は勿論、著しき影響を經濟界にも及ぼすものなる事を推知し得るのである。卽ち撫順の石炭と石油は日本燃料の死活問題となる所以である、故に吾人は燃料に乏しき各國は、燃料の豊富なる支那各地に於て、更に此撫順以上の場所を求め、遠き將來の畫策をするのが必要なりとする思惟する所以である。

最後に撫順の沿革並に採炭方法を述べる事とする。

撫順の沿革

『沿革』撫順炭礦は今を去る凡そ六百年前既に高麗人に依りて採掘せられ、陶器製造の燃料に供せられたるが、清朝乾隆年間、政府は宗祖の墳塋たる永陵及東陵に近き故を以て、所謂風水に害ありとなし、其採掘を嚴禁した。後光緒二十七年（明治三十四年）に至り、清國人が政府の允許を得て採炭を開始し、次で其の採炭權は露國極東森林會社の有に歸し、事業未だ其緒に就かざる時、日露の役起り我軍之を占領して、野戰鐵道提理部の經營に移り、更に明治四十年四月滿鐵會社之を繼承して今日に至つたのである。

露國極東森林會社野戰提理部より滿鐵

『採炭』滿鐵會社繼承當時に在ては、千金寨、楊柏堡、老虎臺及煙臺の四坑のみにして、一日僅に三百噸內外の採炭なりしが、其後大山、東鄕の二大竪坑開鑿せられてから、明治四十四年度に於ては、一躍一日平均採炭四千噸に達した、大正四年度より萬達屋坑及び古城子露天掘の採炭を開始し、更に七年度より新屯坑、龍鳳坑及古城子新露天掘の開鑿を始め次第に出炭量の增加を來した、現在前記八坑及露天掘を合せて、一日平均出炭高約二萬噸、年額六百萬噸に達する、而して尙將來の需要に順應すべく、所謂大露天掘の計畫を立て、大正九年度より工事に著手し、急速に古城子新露天掘を擴張して、古城子舊露天掘に連結せしめんとし、更に十二年度より老虎臺西方に東ケ岡東露天掘

年額六百萬噸

の開鑿に著手し、目下表土岩の剝離中である。

而して市街地の一部分（數千萬圓の移轉料を要す）を除去して、其下の鑛物を掘るのである以て其規模の廣大を知る事が出來る。

余は主として露天掘及大山炭礦を觀た、露天掘は挿圖（第二圖參照）の如く規模の大なる事は何人も直ちに首肯するが、大山炭礦は其坑中に入りて始めて其規模の大なるを知つたのである。卽余は炭礦長の指圖により、千三百尺の坑中にエレベーター（タービン活動せり）に依り入つたのである、其下る時先づ眞暗（マックラ）なる而も瓦斯の充滿せる竪（タテ）坑に、異樣の感を抱きつつ其千三百尺の底に奇音と共に到着するや、坑內は地熱にて極度に暑きも附近には橫坑四通八達加ふるに電氣室（タービン活動せり）あり　坑夫休憩室（數百人を收容す）あり、電燈もあり通風器により、新鮮なる空氣の注入あり、之により竪（タテ）坑の萬事は首肯せられた、茲に大規模の一端を述ぶるのである。

千三百尺の坑內の景況

我國鐵の自給自足

鐵の需要百萬噸六十萬噸は支那より

九、鞍山製鐵所と我國鐵の自給自足の將來

鐵は燃料と共に工業材料に缺くべからざるものであり、又一國兵器獨立の成否に關するものである。然るに現今我國に於ける鐵の需要、其他の關係を考察すると次の樣である。

卽我國鐵の一年の需要は概ね百萬噸であるが、厄介な事には其原料の百分の二十（20%）は外國より、百分の六十（60%）は支那（主として大冶（タイヤ）より）、殘りの百分の十五（15%）は朝鮮より、百分の五（5%）は我日本內地より補給してをるのである。

而も其製造は、多くは以上の各所より原礦を運送するもので、八幡で五十萬噸北海道で十萬噸、鞍山で二十萬噸、其他は外國製品である。

而も日本內地に於ける原礦は、僅少なるに不拘茲二、三十年後には盡きんとして居る、誠に心細い感がする、況んや一朝有事の際には如何とも致し難き事態となる事と信ずる。

鐵鑛三億噸

投資四千五百萬圓

向ふ百年間

選鑛場

然るに誠に有り難い事には、此南滿洲の鞍山には、半徑約四里（約十五粁）の地域に、地表だけでざつと三億噸の鐵鑛がある、而も其上現地に於て直に鐵に製造し得るのである、即同所で採掘せられた物が直ちに同所で製鐵せられるのである。こんな好都合の事はない、現に滿鐵は四千五百萬圓の投資をして居る、故に此製鐵所が完全になり、一年五十萬噸を製出し得る事とならば、少くとも二百年間は鐵の自給自足が出來る譯である。假令止むを得ず他より補給し得ざる場合に於て百萬噸の製出をしても、百年間は行けるのであるこれが當所の强味である。只戰後の鐵價大暴落と、原礦が比較的含鐵分の少き爲年々二百乃至三百萬圓の缺損を生じて居つたのであるが、現在では八幡の製鐵所にもなき選鑛場（他に類のなきもの）を設け、鐵鑛を還元（カンゲン）培燒して磁鐵となし、容易に且安價に製鐵が出來る樣になつたのである、故に今後の當所の經營は相當採算がとれることになるだろうし、又これが國運に關係する所甚大といわねばならぬのである。而して現在は二基、一年二十萬噸づつ製鐵できるのであるが、何時（ナンジ）にても百萬噸迄、擴張し得る準備が整つてをる、殊に地域の廣大と、勞銀の安價なるは、とても內地のそれと比較にならぬのである。

水の問題

又當所で注意を要するは、水の問題である、水の不足は可なり當所の經營を困難ならしめたが、今日では水道（大水槽）を造つて辛ふじて自給して居る、即困難は困難だが井戸を掘れば千山川の川床から水が湧出するから、その澤山の井水を、附近の山の頂上の大水槽に入れてそれより製鐵所は勿論附近（鞍山一圓）の市街地に供給してゐるのである。尙一つの問題がある、夫れは日支合辦だから、支那人にも少々關係がある事である。從來支那人に金を與ふると、大冶の鐵山開所當時と同樣使ひ込むのである、故に現在では支那人と手を切る樣にしてある筈である。

日本當路者の苦心

現在日本當路者に於ても、非常に苦心し保護し、經營せるが故に彼の張郭戰の當時の如きは關東軍司令部でも、可なりの注意をなし、支那兵の破壞を防禦する爲獨立守備大隊(平時は一中隊)が攻防演習を行ひ、軍司令官も視察に來たとの事である、如何に軍部でも注意して居るかがわかる。

如斯當製鐵所は、我國にとりては死活を制するものなるが故に、左に其概要を述ぶる事とする。

製鐵所概要

『鞍山製鐵所概要』　大正十五年四月調

大正六年開設

(一)『開　設』

大正六年五月建設工事に着手し(大正八年四月二十九日)始めて第一熔鑛爐の火入を行ふ。

(二)『鑛　山』

當所使用の鐵鑛は、日支合辦鞍山鐵鑛振興無限公司より供給を受くるものにして、其鐵鑛山は現在の製鐵所を中心として、半徑約十五粁(約四里)を以て北東より西南に向て畫ける半圓形内に點在し、其の埋藏鑛量地表のみにて大約三億噸を算す、卽ち(櫻桃園、王家堡子、關門山、大孤山、西鞍山、東鞍山、小嶺子、鐵石山、白家堡子、一擔山、及新關門山)等是である。

鐵鑛山は半徑四里内にあり

現在主として採鑛するものは大孤山にして一日の採鑛能力二千五百瓲なり含鐵量三十五『パーセント』を基準とす、媒容劑たる石灰石も亦振興公司より供給を受くるものにして安奉線火連寨驛附近より採掘す一日平均七百瓲である。

含鐵三十五%

(三)『石炭及骸炭』

熔鑛爐用骸炭の原料は(本溪湖炭及撫順炭)を配合して使用し一日の使用量約一千二百瓲である。

(四)『製鐵工場』

工場及市街四百五十萬坪

熔鑛爐二基

工場構内の面積約百五十萬坪構外水源池其他約四十五萬坪外に市街經營の爲め約二百六十萬坪の土地を有す、工場設備は第一期計畫に屬する熔鑛爐二基及之に附隨する諸設備完成せり、其大要を擧ぐれば次の如くである。

◎銑鐵製造設備

（イ）熔鑛爐　二基、内容各五三〇立米、年産二〇萬瓲

（ロ）熱風爐　八基、三通式、直徑七、三米、高さ六〇米

◎骸炭製造設備

（イ）骸炭爐　一六五窯、蓄熱利用式、一日生産骸炭八〇〇瓲

（ロ）洗炭場　能力一日、一、二〇〇瓲

◎選鑛設備

（イ）還元焙燒爐　八基（鞍山式）一箇年處理鑛量八〇萬瓲

（ロ）選鑛場、碎鑛、磨碎、分粒、磁力選鑛裝置を有す、能力一ヶ年八〇萬瓲

（七）『從業者』（大正十五年四月一日現在）

職員		一二一八
傭員	日本人	六六九
	中國人	一、六五一
鑛夫及臨時勞働者一日平均	中國人	三、九〇〇

第三章　支那全般に關する問題

一、不平等條約の撤廢と實際問題

世界大戰後支那に於ては一大變化を來したものがある。それは卽支那民族精神の勃興である。何となれば支那は大戰前には世界の列强に壓迫せられて、手も足も出なかつたが、大戰に當りては、幸にも彼の尊大な歐米人が戰役に疲れ、誰でもよいから援助してくれろとの依賴心を出し、今迄鼻であしらつて居つて外交上にも何等の勢力を與へなかつた支那迄も參戰せしめた、殊に滑稽な事には支那は軍人の代りに其苦力（クーリー）（人夫）をして參戰せしめたのである。其結果支那は戰後戰勝國民となり、遂には獨逸の權力を奪回し、墺勾（オーバン）國を驅逐し、且露國に對しても對等の勢力となり、遂には列强與し易しと思惟（シイ）せしめたのである。況んや我國が彼の山東半島を還附せしに不拘、却て日本益々與し易しとなすに至つたのである。於是乎國民黨の政客先づ不平等條約の

支那民族精神の勃興

軍人の代りに苦力（クーリー）の參戰

撤廢を提唱し、支那知識階級の輿論となり、大學方面の研究となり、スチューデントムーブメント（卽學生運動）と迄なつたのである。此の空氣は益々濃厚となるのみで、今に段々始末におえなくなるから、大に注意をせねばならぬのである。

然るに支那人の欲せざる、此不平等條約を作つたものは、誰かと云ふと支那人自身が、外國人に作らせたものも少くない。先づ彼の阿片戰爭を皮切にして、段々不平等條約を增加して、今では支那の主權が奈邊（ナベ）にあるやを疑はしむるものあるに至らしめたのである、故に今日之を提唱するは、隨分虫のよい話である、須らく（スベカ）靜に自國の狀態を考えて見るがよい、卽支那の法律も、裁判も警察も殆ど信用が出來ない、法律の明文はあれども、一部權力者の法律の樣なものであり、支那四百餘州には漏れなく實行せられてをらず、裁判に勝つも執行が出來ぬ事やら、警察權が不法に濫用せらるる事が屢々あるのである、如斯事

不平等條約の增加

外交團と不平等條約

は、擧げて數え切れぬ程である、故に諸外國政府が、各自國民の其貴重なる生命財産を、支那國に一任する軍は今暫く出來ないといふ所以である。

然るに最近に至りては、支那に於て此治外法權の利害を大に異にせる國が大分にある、換言すれば外交團には此不平等條約の利益を受けて居る、グループス(集團)と受けてゐないグループス(集團)とがある。此の受けてゐないグループス(集團)が受けてをるグループスの行動を妨害せんとして居る。此の妨害役は露西亞が筆頭である、次に獨、墺チェック、スローバキヤ、ポーランド等である。これ等のものが、支那國民を煽動するから、始末におえぬ結果が出來る、最近では和蘭に對する條約を政正せんとし、金法問題では大に佛國に痛手を與へたり、此意氣は逐次各國に及ぼさんとしてをる。故に小生在燕中列强各代表者は此の不平等條約撤否に關し、研究討議中にして、九月中旬終了したのである。其研究の內容は次の樣である。

十三國は拒絕に決す

(一)　治外法權行使の現狀
(二)　支那法規及裁判法規
(三)　司法制度の運用
(四)　勸告書

の四部からなり約二百枚に亘る調査書である。此の調査書は日本と米國とが主となりて草案を提出し折衷したものである。我國の代表者も大に努力した樣子である、大體日本は關稅會議同樣此隣邦を救濟せんとして、最初より最も好意を以て接したのである。しかしながら前述の樣な現狀では、如何とも致し難く結局十三ケ國調印の勸告書は、拒絕に決したのである。卽各國の言ひ分は、此治外法權を撤廢すれば、屢々出來る混亂に逃げ場所がなく、支那人自身ですら大に困難とするだろうといふてをる、又關稅を獨立せしむれば、地方官憲の懷中を肥

全然撤廢危險は

日本人に注意

すのみで、結局一部の腹肥しをなすに過ぎぬと噂されてをる。

日本は、此等の問題に就ては、始めより大に盡力したのであるから、支那の實情次第では撤廢敢て辭せないのである、しかし近時稍もすれば唱へられんとする此治外法權の撤廢と、交換的に商租問題を解決せんとするが如きは、大に不可とする所である。

但し若し撤廢の眞の必要の時期が來るとせば、特に條件を設けねばならぬ。在支邦人の有力者中にも場合によりては之が撤廢差支なしと云ふものがある、併し此の場合支那人同樣に土地の所有權、居住の自由を得ねばならぬと云ふてをる、併し全然治外法權を撤廢するは目下の支那として吾人は隨分危險であると思惟する。尙茲に一つの注意せねばならぬ問題がある、それは邦人にして、此治外法權に隱れ、隨分勝手氣儘な、日本內地では法律にふれて到底出來ぬやうな事をやるものがある、是等は大に愼まねばならないと思ふ。

アメリカ全權の所感

支那の根本禍根

之を要するに、治外法權の撤廢は、支那の局部局部より起る問題にして、而も遠き將來の問題であるが、今から大に之が對策を研究して置かぬと滿蒙問題の如きものがあるから、日本人として支那人なり歐米人からずるずる引きずり廻される恐れがある、況んや此の恩惠を受けざる第三國。卽露、獨、墺國等や殊に露國の策動等に想到せば慄然たるものがある。

最後に此件に關する、外人代表ともいふべき人、支那關稅會議のアメリカ全權にして、同時に支那司法制度調査委員會で議長を勤めたストローン氏の歸國の際に於ける支那に關する所感を擧げる事とする、他山の石として大に參考に値すると思ふ。

『支那の根本禍根』　軍閥の同士打で年中內亂の絕えぬのは、實に支那の根本禍根である、しかも吳佩孚といひ、張作霖といひ、さては蔣介石、孫傳芳などの、軍閥頭目連が、兵を動かし、相互の武力にまで

側杖の支那人民

治外法權亦然り

訴へ大に鎬を削らねばならぬ、政治上の大きな、公理公由が存在しないのだから驚かざるを得ぬ。それにつけても一番氣の毒なのは側杖を食はされてゐる支那の人民だ、支那代表は國際會議にいつも完全な支那の主權を確立したいと雄辯に捲し立てるが、自分の觀るところでは國の主權恢復を呼號する前に、もつと肝要な問題がある、すなはち、支那の政治家および軍閥に對し、支那人民の權利尊重を强調して、彼等の國利民福の大切さを十分に認めさせることである。

『治外法權亦然り』　治外法權撤廢の如きも速急に同意し難い一つの理由がこゝにあると思はれる、現下の法の不備及び法を適用する司法官廳の缺陷もさることながら、治外法權を止めた後で果してこれが、軍閥の勢力を更に增大する素因にならぬであろうか疑ひなきを得ぬのである。

支那人は官吏を官匪と謂ふ

二、支那人は官吏を官匪と稱す

支那人は近頃官匪といふ事を頻に言ふ、卽何故かと謂ふと官吏と云ふ職は權力を濫用して人民の財寶を搾取し、其野望を達し腹を肥すに最も有利な且好都合なる經濟的行爲の一職業なりといふてをる。某々省の官吏特に軍閥の如きは、現代亂世を利用し特に露骨に行つてをるといふ、故に之を官匪と稱す以て支那の內政の狀態を知るを得るのである。しかし北伐軍（蔣介石軍）の樣に、あまり掠奪をやらず、一時は人氣を呼ぶ軍閥もあるが、一時は勞動者階級には歡迎せらるるが、軍費の不足は、止むを得ず中產階級以上の者に重稅を課する樣になるから、結局金錢物品の强制執行換言すれば體裁のよい掠奪となるのである。

支那の軍閥とは如何

三、支那の軍閥及官吏とはどんな者か

支那人は又次の事をいふ、支那の軍閥は日本の軍閥と頗る性質を異にする、日本の軍閥は專政の覇者とも考へられる、支那の軍閥は我戰國時代の群雄に似てそれでなく、野武士でなく、山賊にも非ず、大體約言すれば大馬賊主義とでも云へば實質に近からんか。

即自己の繩張内に於ける人民は、相當の保護もするが税金を課する運送保險の樣な事もやる、生産事業もやる所謂其目的は國利民福に非ずして、彼等一味の私財の蓄積と勢力爭である、故に大將といひ中將と云ひ師長(師團長)といひ旅長(旅團長)といひ參謀長といひ省長といひ縣知事といふも、之を約言すれば大、中、小頭目の樣なものであると謂はれてをる。

大、中、小頭目

此の大、中、小頭目の政治に從はねばならぬ支那國民こそ頗る氣の毒なものである、此點なども大に其國民性の研究を要すべき點であると思ふ。保境安民といふ事は畢竟國利民福の增進に非ずして其の繩張内に他の頭目の勢力を入れぬ事である、故に他の頭目の下に直ちに戰鬪をする、又元氣が加はると他境を侵すのである、人民の事などは一向平氣である。

しかしながら近時支那の國民思潮が一般に漸次進んで來たから各軍閥官吏ともに從來の如きやり方では行かなくなりつつあるは爭はれぬ事實であるが、又支那國民全部が軍閥官吏に自己の權利を認めしむるが如きことは、遠き將來と思はれるから、當分は此調子で進むものと觀て差支えないと思ふのである。

我帝國の有難味

斯く觀し來ると我日本帝國の有難味を痛切に感ぜられずには居られないのである。

阿片と軍閥

四、阿片賣買による官吏及軍閥の掠奪行爲

阿片は法律上の禁制品である、故に濫りに普通人の賣買を許さぬ。然るに官吏は陰に陽に之が賣買を行ふ、某軍閥殊に河南、湖北省方面の如きは公然之を行ひ、多額の金員を集積して軍費にせるものさへある。是等の事も亦支那の實情を知る事が出來る點である。

序ながら露國の阿片密輸入方法を述ふるならば、露國は彼のカラハン大使時代國民軍に金錢の援助の外、阿片の補給をなしたといふ事である、即浦鹽其他より阿片を外交官憲(露國大使館)の荷物として、毎月支那に輸入したそうである、如斯支那の阿片の補給はあらゆる方面よりせらるるのである。

支那農民は貧なり

戰時稅は一畝(百八十坪)壹圓五十錢ヨリ貳圓八十錢

地主所得二圓五十錢ヨリ三圓

五、支那の農民は一般に貧なり

支那一般の農民は家族制にも由來するが一般に貧である。

即農民には在來の正稅及、地方稅の外、此頃では戰時稅を多額に課せらるゝのである。例へば奉天省瀋陽縣では人口稀薄なる箇所で一畝に付(一畝は約百八十坪)大洋一元半(一元は日本の一圓强)普通の村落では一畝、二元八角に達して居る、本年は其れ以上に課せられてをる。而して普通の小作料中地主所得一畝に付約二元五角より三元迄、小作人は地主と同樣の所得となる故に地主は所得の殆ど全額を官吏に納めることゝなる、如何に重稅に苦しみつゝあるかを知り得るのである、而も穀物は奉天票にて買收せられるにより、奉天票の下落に伴ひ遂に窮地に陷る例が乏しくない、之等は日本內地に比すれば誠に天地宵壤の差があるのである。

尙吾人と感を同ふせる、アメリカ關稅代表者たる、ストローン氏の

惡政下の樂天人

左記の意見を紹介せば讀者も諒とせらるゝだろう。

『惡政下の樂天人』　あの惡政の下にあつて、その日その日を樂天的に働いてゆく、支那人の努力と勤勉とには敬服のほかない、支那が列國の間に若干の信用を維持してゆくとすれば、それは推賞すべき支那人民のおかげであつて、支那の進歩を妨げ、支那の威信に泥を塗るものは支那の惡政治家と軍閥であろう。

如斯ストローン氏は外人として、隨分徹底的に、支那の實情を研究したらしい、隨て同氏歸國後二、三の個所で支那の實情を報告演說をした樣だが、今迄の親支論者は、一驚を呈したといふ事である。

支那兵と靴

不思議な事

支那演藝の取り止め

少々雨が降つた

六、支那兵と靴(雨が降れば戰爭は出來ぬ)

余が天津滯在中不思議な事が一つあつた、それは何かといふと、支那の芝居なり之に類する演藝を、一回でも視て置きたいと思ふて、其前日より日本軍司令部の紹介で見る事にきめてをつた、又演藝場からは歡迎の意を表して來たのである。

余は其翌日夕食をすまし、大に支那趣味を味はんとして待設けてをつた、然るに夕食の將に終らんとする時、軍司令部の某から本日の支那演藝は取り止めになつたとの報を得た、折角の心待であるから不思議な二、三を問ふたのである、其理由に曰く『先刻少々雨が降りましたから多分それで止めたのでせう』と、尙翌日其筋の人に聞いたが全く雨の爲らしい、然るに余は勿論天津在住の日本人などには雨と思へぬたつた五分か十分間程ばら〳〵と降つた程度であるのである。實に開いた口が閉がらなかつた。

靴が濡れる

御都合主義

卽演藝の中止の理由は人出の少き爲なりといふ、人出の少なきは雨が降つた爲なりといふ。雨が降つたから靴が濡れるからだといふ。靴が濡れて困るのは靴が木綿製だからといふ。又道路の惡いことは、とても日本では考へられぬ程度である、滿洲は勿論北支那でも雨が降るとゴタゴタである、殊に郊外にでも出たらとても歩けぬ處も多いのである。然らば支那人全部がそうかと、いふとそうでもない、下等の勞働者なり又用向のある上流の者（大概馬車、人力車に乘る）は外出はしてをるが、しかし其夜の人出は余の滯在中に於て、成る程少い樣な感じがした、永く居住する日本人は全く內地では考へられない事だといふてをつた。

これ等の事實は支那の國民性の一端を表顯せるものと思ふ、所謂御都合主義とでもいはうか、呑氣な處が表はれてをるのでなからうか。

余が今回及從來より觀た支那の兵隊卽ち滿洲、北支那、山東兵も亦其

支那の兵隊

冬は綿入の軍服

雨が降れば戰爭は出來ぬ

夜間の戰鬪は嫌い

李景林軍の失敗

靴の一部は矢張り木綿製である、最も其裏面は皮革類やら護謨製だが卷脚絆も木綿製である、軍服も亦勿論木綿製であり、冬になれば綿入になるのである。將校の上級の者になるとハイカラな長靴、毛織物製の軍服を纏ふて居るものもあるが、大體殆ど全部は木綿製である、外套亦然りで、あまり雨具の用をなさぬ、故に雨が降れば戰爭が出來ぬのである

如斯平常養はれたる國民性は、戰爭中でも雨が降れば敵味方双方戰爭を中止するのである。しかしいつもそうも行くまいが大體に於て呑氣なものである。之と同樣夜間の戰鬪は、これ亦最も彼等の厭ふところであり、最も嫌ふところである、故に由來支那の戰史には夜戰の大なるものがない、一部の奇襲位はやるが部隊殊に大部隊の夜襲などは思ひもよらぬ事である、卽夜になれば敵も味方も先づ休養するのである、それであるからたまに小部隊の夜襲でもしたならば奇効を奏する事がある、卽李景林軍が馮玉祥軍に破られた其大原因は馮軍の一部（一

孫軍の夜襲

御都合主義は失敗の基

最近の支那軍隊

中隊以下のもの）が夜間天津北方の、李軍の一角に侵入したから崩壞したのである。又最近南昌の蔣介石の本營も、孫傳芳軍の一部に夜襲せられ、蔣介石及露軍將校二名が命から〳〵逃げて、而も蔣の戰死說を傳へたのも、此小夜襲の爲である。故に蔣軍でも大に腹を立てて、九江に居る孫傳芳の本營を奇襲して、孫が楊子江を下江したのも之が爲である。かくの如く觀察し來ると支那の國民性の呑氣さがよく判斷せられる、即吾人は此國民性を知ると同時に支那人の如く萬事御都合主義でやつては、飛んだ失敗を招くといふ事を研究して置かねばならぬ。偖て從來の支那人は斯樣に隨分呑氣であつたが、近頃一般に多數の日本顧問を招聘し、日本式軍事訓練を施しつゝあるから、一概に從來の國民性を以て將來を推斷する事が出來ぬ樣な事もある。即前述の奇襲を屢々やつてをるが如き實例もあるから、今後は支那人に對しても相當の注意を拂ふ必要があると信ずる。

支那南部の大立物

五省聯合の實勢力

民意尊重論者で堅實

日本式訓練

第四章　結論

一、孫傳芳と英米並に五省聯合の將來

五省聯合軍總司令孫傳芳氏は、第二奉直戰後に表はれた新進氣鋭の支那南部の大立物である。しかし五省聯合とはいふものの實際の彼の勢力は先づ江蘇、安徽、浙江位で、江西は彼といふよりも吳佩孚系に近い、又福建に至つては先づ都合のよい時のみの聯盟といふてよい、隨つて彼の有する兵力は八、九萬で、旅團の數は三十個位である。

乍然、彼は近來の支那軍閥中、稀に見る民意尊重論者である。又一般の軍事政治等凡て確乎たる基礎により行ふ方針で堅實である。憲政會の現內閣の施政方針と稍似て居る、故に彼は先づ軍事を統率する爲には、軍官學校を設け、日本士官學校卒業者を重用し、敎練演習も日本式に眞面目に行はしめてをる。又日本軍事顧問としては岡村中佐を始め數名を招聘してをる。所謂彼は精兵主義であつて、可成兵力を減

軍閥中一番の勢望

彼の達見

財政の整理

ぜんとしてをる。

『彼の勢望』は、目下の軍閥中比較的よいといふてもよい、何となれば彼は次の樣な方針で施政をしてをる。

『第一』に各土地の有力者、德望家、實業家等の意見を尊重し又は重用する、例へば浙江省では省の有力者夏超に民政を委ね、江蘇省では一面識なき德望家、陳陶遺に民政を一任し、最近上海の市政の爲內外人に好評ある、丁文江(歐米に留學し才幹ある三十數才の快男子)といふ小壯政治家を選定したりしてをる。是等は實に他の民意を尊重し人物を透視するに達見あるところである。此達見に關しては支那駐在某總領事、並に某將軍(皆共に彼に最近接したる人なり)等の口を揃へて賞讃せるところである。實際懸引なき所である。

『第二』に彼は兵を少くして、財政を整理し、民に重稅を課せざるを主義としてをるこれ又民意を尊重せる所以である。

彼は慓悍性乏し

天下統一は覺束なし

彼又細心にして浙江、江西、福建等には彼の腹心の部下を所々に派遣し、其聯盟の崩壞を防いでをる故に夏超が獨立せんとした時にも直ちに之を擊破したのである。卽彼は今や五省の內政、軍政を改良して大に實力を養ふてをる。此保境安民の主義の下に、彼の施政が成就するの機に至らば、彼の地位は案外鞏固になるであらふ。故に彼は吳張の聯盟にして破れんか直ちに北上して河南、山東を奪ふべく恰も第二奉直戰後奉軍を山東に壓迫したるが如くであらふ。然れども彼は性慓悍の氣慨に乏しく、五省の聯盟屢々危急を告ぐ、殊に有力なる廣東軍側背にあり、加之五省聯合軍兵の性質は怜悧なるも軟弱、剛堅の氣象に乏しく、屢々北伐軍に破られたるが如き狀態にして懸軍萬里は意想外なるを以て、自然孫傳芳が中支以南一帶を統一するが如き事は、斷じてなし得ざる處である、卽彼は人氣者には相違なきもあまりに民意尊重は支那の現在に適せざるが如く先づ先づ支那一部の首領たるに止

孫と英米

まるだろうと考へられる。

『孫と英米』　英、米の中支那に對する勢力の偉大なるは既に定評ある所である、隨つて此支那に活躍せんとする支那軍閥が英、米に接近するは自然にして、孫も亦之が援助により第一回は張作霖を山東以北に壓迫し、今回又北伐軍（露國の後援）を擊退せんが爲、吳佩孚と共に英、米の援助を受け戰鬪に從事してをる。彼又我國と親交を結ぶを忘却せざる樣子である。故に我國も亦彼と親交を結び、中支の勢力を益々擴張するは大に期待する所である。現に北伐軍は彼と英國との關係を探知し概して英國に好意を有せず、彼の英國軍艦を砲擊する等は、此間の消息を窺知する事が出來るのである。

而して最近彼の戰略に一頓挫を來し、或は失脚せざるやを氣遣はるるも、英米の徹底的の後援は、更に彼の頽勢(クヮイセイ)を挽回すべく、支那の事只々一事を以て萬事を推し得ざる處なるを以て、彼も亦此困難の時機を經過せば大に活躍の機もあらんか、幸に自重自愛せよ。

古武士の俤

名總督張之洞
元大總統黎元洪

彼の地盤は心細い

二、吳佩孚と英、米並に武漢の將來（第一圖必ず參照）

段祺瑞沒落後、一時天下の名將軍古武士の俤(オモカゲ)ある如く傳へられたる吳は、如何なる根據を有し、果して幾何の實力ありやを、研究するは徒爾でないと信ずる、即實際の彼の勢力は、薄弱であつて湖北の半部及河南の大部であつて誠に心細いのである、故に曹錕大總統時代の彼の勢力が偉大に觀えたのは、外形のみであつたと斷ぜられる。

即湖北省では彼の部下は約三、四萬、十二個旅であつて、其他の二、三萬の軍隊は、彼の部下でありながら、意の儘に動くものでない、蓋し湖北省は名總督張之洞(チヨウシトウ)氏及元大總統黎元洪(レイグンゴウ)氏などの舊部下もあり、彼の勢力が及ばぬのである、況んや湖北の政治家は、革命發祥地たる關係で最早吳佩孚に對し怨嗟(エンサ)の聲を發して居る、督軍陳嘉謨(チンカバ)亦阿片沈醉者であつて、殆ど部下の信望は全くない、故に彼の湖北の地盤は誠に心細いと謂はねばならぬ。

土匪首領樊鐘秀

張其瑝

又河南省では、彼の部下は約四、五萬、十六旅を有して居るが、土匪軍として樊鐘秀の軍が三、四萬も居り、最近此土匪の爲攻撃せられ勝敗決せざるが如きは、彼の勢力の衰へたる徴である、況んや彼の直系督軍冠英傑も、亦阿片沈醉者で部下に信望がない、只彼の部下中最も元氣がある策士は、張其瑝である、故に彼の部下は、殆んど用ゆべきものがないと謂ひ得る、一面彼の武將氣質で、孫傳芳などの如く、圓轉滑脱、能く他に調和し、部下の選定使用宜しきに適するといふ譯には行かない。

故に彼の將來は遺憾ながら、自然に形勢悪化の兆を示してをる、唯々茲に彼の勢力を維持せる唯一の道程は、英、米の援助である卽第一奉直戰では米の援助を受け、第二奉直戰で命旦夕に迫つた場合には米艦により、秦皇島より青島を經て長江中央に逃れた如き、或は今回の廣東北伐軍との對戰には、英國より軍費を得たと傳へらるゝが如きはそれである、故に彼の生命は部下の信望といふよりも、一に英、米の援助の賜物であるといふてよい。故に彼は漸くにして武漢の地を維持するに止まり、而も今日では北伐軍の攻略に遭ふたのであるから、今後之を擊退したりとするも、到底支那の統一をなし得るが如き大人物でもなく、又實際に支那中央以南に於ても、實力に乏しいと斷ずる事が出來る。

武漢の維持支那統一は覺束なし

今後の形勢は急轉直下

況んや最近北伐軍の勢力は侮り難く、着々として其地歩を進め、其政府を武昌に進めんとするが如き狀態にして、今後の形勢は或は急轉直下遂に起つ能はざるやを思はしむるものがある、又一面に於ては張作霖の勢力は、牢乎として拔く能はざるに至つたから眞に彼の將來は多くを囑望する事が出來ぬと信ずるのである。

彼は醫者、馬賊ともいふ
民國二年奉天師團長
五年督軍兼省長
十一年北京以北の全勢力
十一年第一奉直戰
東三省の獨立宣言

三、張作霖と日本並に東三省の將來（第一圖必ず參照）

張作霖氏は奉天省の海城生れである、初めは醫者であつたが、日清戰爭後感ずる處あり軍人になつた、又一時は馬賊の群に入つたとも稱せられてをる。其後累進して民國二年（大正二年）奉天の第二十七師團長となつた、これが抑彼の出世の糸口である、即五年には奉天督軍兼省長となり七年には東三省巡閲使、十年には熱河、察哈爾、綏遠の經略使となつた、これで彼が北京以北の全勢力を得た譯である。故に彼は段々政治的野心を起して、中央政府乗取策を運らし、遂に十一年第一奉直戰爭を開始したのである、然るに直隷軍の爲に一蹴せらるゝ事となり、所謂保境安民の精神に復歸し、東三省の獨立を宣言した。しかし彼の野心は底止すべくもない、先づ兵工廠を造り、軍の編制、制度を改め、教育を綿密周到にし、精兵を作る事に全力を注いだ。日本より用兵並造兵の大家、即多數の顧問を招聘したのは此時である。如斯用

十三年第二奉直戰
支那統一企畫
李景林
張宗昌
姜登選
楊宇霆
支那全般は過大
關稅會議

意を整へ、準備を周到にして、遂に十三年九月第二奉直戰には、見事直隷軍を擊破して、遂に吳佩孚をして再び起つ能はざらしめ、曹錕を退位せしめた、茲に於て鬱勃たる彼の大野心は、再び爆發して、遂に支那の統一征服を企畫するに至つた。

先づ直隷省には、李景林を督軍に、山東省には張宗昌を、安徽省には姜登選を、最南の重用地江蘇には、楊宇霆を督軍に任命した。於是か作霖の支那統一の事業は、表面上大半成就したのである。乍併東三省に覇者たり得る作霖も、支那全般としては餘りに廣大にして、財政手腕共に容易ならざるを看取し、老人段祺瑞（六十數才にして往日の元氣に乏しく、政治は概して下僚任せなり、故に昔日の彼に非ざるなり、換言すれば天下を背負ふの概に乏し）を守り立てた、又財源を得る爲關稅會議を開催するに至つた。

此關稅會議は支那政府支持には頗る有意義なるも、作霖の力に於て

鬼に金棒

孫傳芳の反對

吳佩孚の再起

行はんか、一に作霖のみの勢力增加を來すに過ぎざるものなりとは、他の軍閥が聲を揃へて反對せし處なり、即政府に財源を得るは支那將來の爲には誠に結構なるも、目下の時機としては、一に作霖をして鬼に金棒たらしむる樣な次第なるが故に、遂に他の軍閥が聯合して、關稅會議反對の氣勢を擧げたのである。

先第一に反對したのは、五省聯合を企畫したる孫傳芳なり、衆兵を提げ奉軍の最先鋒(僅かに二師團强)楊宇霆を不意に襲擊した、故に宇霆の大を以てしても如何ともすること事能はず、僅かに身を以て逃れた、彼の部下師團長の一名は戰死をした、部下兵卒に於ては其大部は崩壞したのである、如何に孫の襲擊が疾風迅雷的であつたかが判る。次に孫は安徽の姜登選を破り、之を山東に壓迫し、而も山東の一角さへ占領した。しかし彼は己の力量を知り、更に北上せなかつた。始め孫の五省聯合軍を率いて起つや、相呼應して起つたのは吳佩孚である

馮玉祥の反對

御曹司張學良

副司令郭松齡

第二奉直戰の失敗は可なりの大打擊を受け、殆んど彼の餘命を疑はしめたが、幸にして河南、湖北の舊部下は彼を守り立てて再起せしめたのである、而して孫に連繫して京漢鐵道線を北上した。

又孫、吳の奮起により起つたのは馮玉祥である、馮玉祥は第二奉直戰に於ては奉軍に味方し、直隸軍擊破の大使命を助けたが、遺憾ながら作霖の行賞に與らなかつたから、茲に再び逆戻りしたのである。馮の心事は到底我々日本人では考察は出來ぬのである。於是乎作霖は四面楚歌の狀態となり、再び山東以北に蟠踞するの止むを得ざるに至つたのである。

如斯苦境にある際、一大事變が勃發したのである、即此三面の敵を攻擊する爲御曹司張學良(當年二十八才の若者で米國士官學校出のハイカラ風であつたが現今は日本軍事顧問の指導により、殆んど日本化したと云ふ)を總司令とし郭松齡を副司令として、奉天の最精兵と火

信長と光秀

吳俊陞
張作相

旅順、大連に逃る

砲の殆ど全部を擧げて關內に入らしめた、然るに圖らざりき、郭は張を倒し、東三省を自己の手中に收むるは此時なりとなし、豫ての計畫に基き、戈を逆にして奉天に迫つたのである、恰も天正の昔信長が、光秀をして、丹波路を經て中國征伐を命ぜしに、圖らざりき光秀は老の坂を東に入りて、主君信長を京都に於て害したると同樣の運命を辿らんとした。而して郭の背後には馮玉祥あり其の背後には露國あり、郭の精兵に、加ふるに後援者の有力を以てしては奉軍は、錦州以西に於て殆ど崩壞再び起つ能はざるの運命に陷つたのである。於是乎、奉天では殘留兵を糾合し、又一方吳俊陞、張作相をして其省內に歸還し募兵せしめたのである、此間郭の東進は着々として進み、奉天は將に累卵の危に瀕せんとし、剛腹なる作霖も亦幾度か下野を聲明し、又は撤回し奉天の文官は勿論武官家族も旅順、大連に難を逃れ、家財を滿鐵地域に移轉するなど、又吳俊陞、張作相は其募兵を以て南下せんとするも

イワノフの妨害

白川軍司令官の嚴正中立聲明

露の東支鐵道長官イワノフは之を許さず、徒步又は騎行するの止むを得ざるに至つたのである、眞に奉天の危きは目捷の裡にあつたのである。

幸なるかな、幸なるかな彼の根據地東三省は、實に我大日本帝國の特殊利權の地なり、郭軍にして大擧侵入せんか、我利權を蹂躙せらるるの見地より我政府は增兵を決行し、白川軍司令官は三十支里以內に於て戰鬪行爲を禁じたり、これ作霖にとり天の助けなり、郭は營口より一部隊を入らしめんとして日本軍に拒絕せられ、荏苒數旬遼河河畔に攻擊を決行したる時は已に機を失し、奉軍の大部隊到着し、郭は遂に敗退するに至つたのである。支那の國民性は兎に角、我國民性に比ぶれば郭の行つた反逆はあまりに道義に反し、其敗北も當然の歸趨であると信ずる。しかし果して我日本帝國に此勝敗何れが貢獻するかは暫く論ずる事を差控える。作霖此戰に蘇生して暫く保境安民の精神に

南口攻略

張將軍の將來

僅かに十年

部下
楊宇霆
汲金純
干國翰
高清和
吳俊陞
張作相

歸りたりと雖も、馮玉祥此間に勢力を得て中央政界を支配するに至りしを以て、再び茲に彼は討馮、討赤化軍の名目の下に、昨日の敵たる吳佩孚、孫傳芳と聯盟を結び、先づ北京をとり最後に南口を攻め、遂に馮の死命を制して天下一段落を告ぐるに至つたのである。

然るに一呼吸の隙もなく南方廣東軍蔣介石北伐し來り、吳、孫之に當り奉軍も亦一部を加ふるの止むを得ざるに至る、支那の形勢朝に夕を圖られざるとは此事をいふなり。然らば作霖の將來如何？

作霖民國五年（我大正五年大總統黎元洪の時）奉天督軍兼省長となりし以來僅かに十ケ年、遂に今日の地歩を占め得たり、其部下も亦新進氣鋭の士多數にして楊宇霆（武官にて政治家、年四十二）あり、汲金純（武官四十七才）あり、干國翰（武官年四十才）あり、高清和（文官年四十一）あり、又義兄弟として正直者の吳俊陞（黑龍省督軍兼省長年六十）あり、張作相（吉林省督軍兼省長年四十五）あり、而して多數の軍事政治

小壯者の日本留學

支那全局の支配は覺束なし

保境安民は最も安全策

の顧問を招聘し、而も小壯有爲の士（支那人は勿論日本人と雖も）を多數に外國特に日本に留學せしむ。例へば某日本砲兵中尉を招聘して、日本砲兵學校に於て砲兵射擊術の研究をなさしめ、日本陸軍大學には三名の支那武官を派遣しある等彼は永遠の計をなしつゝあり。要するに、彼作霖は支那軍閥中最も勢力ある者にして、其地勢上地盤の堅固なる又財政の豐なる、其部下の有爲の士ある等、凡てに於て超越しあるも、政治的手腕、政治的有爲の士は、遺憾ながら少數にして、彼の直接部下のみにては到底中央政界の牛耳を取り得さるべし、故に彼の將來は支那の大半は支配し得ると雖も、全局の支配は望み得ざるところにして、若し夫れ永遠の地歩を占めんと欲せば、山東以北に甘んじ而して支那南方軍閥と提携し、尚一般民意を尊重し眞の保境安民の精神に依らば最も安全且良策なりと斷じ得べし。幸に張將軍の益々健康を祝し、其將來の發展を祈る次第である。

張氏と日本

『張氏と日本との關係』は大正五年彼の督軍兼省長となりし時より始まつたのである、爾後彼の大をなしたのは日本に待つ處が誠に多い。所謂滿蒙の地は支那の特殊地域で、容易に他國の侵し得ざる處である。一度は米國領事が日本の特權侵害を試みんとして米本國に獻策をしたが本國は取合はなかつた。これと同樣支那の政府と雖も容易に此特權を蹂躙（ジユウリン）する事が出來ぬ、故に張氏は最も安全地帶で仕事が出來るから一意專心其實力の養成に努め、今日の大をなしたのである。殊に大正十一年の第一奉直戰の失敗は、彼をして大に日本に依賴せざればいけないといふ感念を抱かしめたらしい、又最近の張郭戰で命を拾ふたのは、全く日本の自衞增兵が幸したのである、しかし彼は支那人通有の國民性は除き得ぬから、賴む時は賴み御厄介に成る時は拜むが、仕事がすめば忘れはせぬかと思ふのである、即所謂『咽喉（ノド）元過ぐれば熱さを忘れ』はせぬかと思ふのである。故に今後は共存共榮の主旨に則り

安全地帶

增兵の有難味

共存共榮

今一層我國との折衝に盡力する事を望むのである。又我國民は能く彼の內兜を透見して一面溫良に、一面斷乎たる接衝が必要であると信ずるのである。

大總統問題

最後に臨み彼の大總統問題を攻究せんに、恐らくは大總統たるの希望は山々ならんも、余は今暫く就任を差し控ふるが上策であると信ずる、何となれば東三省と雖戰亂に次ぐに戰亂を以てし、財政の放漫は容易に回復し得ざる狀況にある。又西北方より馮玉祥の進出は時の問題で容易に樂觀を許さない、況んや廣東北軍は巧みに民意に投し、今や其政府を中支那に進めんとしてをる、加之（シカノミナラズ）支那の大勢就中中支以南の民意は北方軍閥を喜ばぬ狀況にある、故に就任するならば須く確固たる地盤を築き支那の統一をなしたる後にすべきものなりと思惟する

民意を待て

然らざれば大總統も單（タン）に空位ならんか。　暴言多謝。

露國の後援
百萬圓
二師團の兵器

口舌の聲伐と
精神的影響
唐生智と葉開
鑫

四、蔣介石と露西亞並北伐軍の將來（第一圖必ず參照）

蔣介石の北伐軍は露國の後援なる事は、何人も知る所である。彼は勿論彼の部下の重なるものは、最近四年間に亘り、露國の軍事教育を受けたのである、現に露國はボロヂンの手を經て約百萬圓と約二師團分の兵器、彈藥とを廣東政府に供給し其後蔣介石及其學生軍、民國日報（國民黨機關紙）等に毎月約十萬圓を援助しありと傳へられる（廣東政府元右傾派巨頭の言なり）。

由來廣東軍の北伐は孫文以來屢々宣言したが所謂口舌の聲伐（セイバツ）に過ぎずして、軍の內容の貧弱と財政の窮乏の爲常に踵を返すに至つたが、其中支那一帶に及ぼす精神的影響は實に甚大なるものがあつた。今回の北伐軍は湖南唐生智軍が吳佩孚部下の葉開鑫軍に對する反感より端を發して、唐生智も亦此廣東軍の後援により、野望を達せんとしたに始まつて居る。彼北伐軍は露國より兵器及軍費を仰ぐ外、徵稅法を改正し

財政の捻出に
苦心

武、漢攻擊に
全力

反北伐軍の勢
力

（一）、脫稅を嚴重に監視す、二、賭博を公許す）又は英國香港政府に罷工資金の解決を要求する等、財政の捻出に苦心しつゝ北伐したのである。而も蔣介石は本年三月廣東に於て、クーデターを行ひたるを最初の人氣とし、漸く近々北伐軍總司令たりしのみであるから、其部下は勿論各軍の統御等に關しては、遺憾ながら徹底を缺くのである。故に最初の北伐計畫は江西、福建省方面に對しては守勢的位置に在らしめ中支那の重點、武昌、漢口の攻擊に全力を注いで大に成功はしたが、江西方面は勢に乘じて南昌迄攻めたが、所期に反し屢々逆擊に遇ひ漸くにして占領したのである、徐ろに彼今後の行動を考察するに、遠く廣東の地を離れ其兵力は分散し、其兵器、彈藥、糧食の補充困難なるのみならず指揮が容易でない。加ふるに軍費に乏しい、故に今後暫く体養整理を要するのである。此時に際し反北伐軍は吳佩孚先づ破れ、孫傳芳の五省聯合軍結束漸く亂れ、遂に北伐軍をして恣（ホシイマヽ）に自由の行動

武漢の地に廣東政府

南支那人は氣概に乏し

をとらしむるやの感あるも吳、孫、張の聯盟昨今成立し山東軍の援助となり、英、米の徹底的後援となり頽勢を支持しあるを以て兩軍の勝敗は今直ちに判定し得ざるべし、然れども北伐軍は巧に民意に投し共産黨の助力により中支一帶を手に入れるかも知れぬのである、殊に武漢の地に廣東政府を進めんとするは彼等の理想であるからである。

要するに蔣介石の最初の旗皷は大に活氣ありしも中途に緩徐となり將に棹尾の勇を振はんとしてをる、しかし中支那一帶を占領し得たりとするも更に進んで北支那迄をも征服し得るやといふに、吾人は夢想だもなし得ないと斷ずるのである。何となれば南支那は由來物資豊富に、加ふるに溫暖的氣候は身體を薄弱ならしめ、氣概に乏しく軍兵薄弱戰鬪に適しないのである、故に兎角口舌が先に立つのである。

更に蔣介石並に其部將等の格段の努力を待つ次第である。

馮は蝸牛の樣な人物

馮は筒井順慶の如し洞ケ峠

五、馮玉祥と露西亞並其將來（第一圖必ず參照）

支那軍閥中最も能く其國民性を表はしたるは馮玉祥氏である、彼は蝸牛の樣な人間で、張家口西北地帶支那の特別區域並に露國といふ樣な安全な貝殼の中に居住して、時機を觀て這ひ出すのである、故に彼のなす仕事は、疾風迅雷的でない、何事も緩徐に行ふのである、又我國天正時代の郡山の城主筒井順慶の如く、常に洞ケ峠を極め込み、他の旗色のよい軍閥と協同するのである、例へば第一奉直戰后の彼の行動を考ふると次の樣である。

第一奉直戰時代は吳佩孚に、第二奉直戰の初めは吳に、終りは張に味方した、又關稅會議中には張に反對した、所謂反覆常なき狀態で、軍人として誠に見識のない人間である、又クリスチャンとして大に神に對して恥ずべき事であらうかと思惟するのである。故に最后には張孫、吳等により排斥を受け張家口以北に追ひ込められ、露國に亡命す

亡命と安全な貝殻

露國の財力器力

氣概に乏し

るに至つたのである、しかし此亡命も安全な貝殻であり、此安全地帶を自由に交通し得るのは彼の强味である、又露國の財力、兵器で戰鬪するのであるから呑氣なものである、彼に限らず支那の軍閥は他人の財力で戰鬪して居るものが多いい、此財力の缺乏が彼の勢力の滅亡であり失脚であるのである。玉祥も南口の敗戰で餘程の打擊を受けたから茲暫くは出て來られまいと思ふが、かの安全な貝殻中で靜養したならば、再起する事も出來得ると信ずる、乍併彼の性格は獨立獨歩斷乎として往くの氣概に乏しい、何時も餘りに利害を打算し、節操を二三にするが故に、余は彼の將來には多くの期待をなし得ないと信ずる、敢て玉祥の意氣を望む次第である、最近屢々玉祥の蒙古方面に歸還し北伐軍策應を傳ふるも、余は恐らく一の宣傳に過ぎぬと斷定してをる何となれば南口に敗退した彼は陸路露國の後援を受くるとしても、容易に再起し得ないと信ずるからである。

支那の外交はやりにくい

中心がぐらつく

外交總長の失脚

支那通が少い

六、外交官の外交と軍人の外交

支那に於ける外交は、隨分やりにくいと御察しする、何故なれば第一に戰國支那の情勢は、時々刻々に變化するから今日の事にて明日の事は圖り知り得ないのである。殊に最も困難な事には其中心が常にぐらつき、時期によりては外交總長は嚴然として存在こそすれ實勢力はなく、何時失脚するかも判らぬのである、斯樣な先生を相手にするといふ事は嘸骨が折れることと思ふのである、故に時期によりては餘程の手加減がいるのである。今一つは一般に外交官は歐米心醉者が多いい故に從來の例によるも歐米に比し派手でなく、而も複雜極まる此支那の外交を好まず、自然永年支那に勤務する事を欲せない、此欲せざるが爲支那通となる事が出來ない、故に概して懸引の多い支那人を相手にしては、あまりに正直すぎて交渉が進捗せぬのである。軍人でも矢張り先づ支那に勤務するよりも歐米に行きたがる者が多いのである。

外交官の外交

樽俎折衝の外交

果報は寢て待て

閑

然らば現在の外交官は如何かといふと、從來の例に鑑み此頃は餘程支那通を置く事となつて居るらしい、しかし外交官を軍人の外交と較べると次の樣な感じがした。

即外交官の外交は樽俎折衝の裡に外交をやるといふ樣子で、あまりに急激な事をいふてもうまく行かぬ、『果報は寢て待て』じや、徐々に外交を進捗せしめようといふ風で、大體呑氣に見ゆるのである。故に一年の內には休暇も當り前に休み、家族を連れて避暑にも行くといふ程度である。又少々閑な某領事館などでは出勤も頗る遲く、退廳も頗る早いらしい、在支那邦人の多くの者などは、今少しく誠意を以て熱誠を込めて外交問題又は對個人の交渉等迄も速に解決せられたいといふてをる向もあつた、恰も內地の小作爭議の裁判が三年もかゝり、米に虫がついてなくなつたと同樣な話である。然らば資本の入れ損である。隨つて支那に關する不斷の研究徹底的調査といふ事に關しては人

最後通牒が慣例

軍人の外交

數も少ない樣だが何だか物足らぬ樣な心地がする、これは在支那邦人一般の輿論である、故に余は敢て苦言を呈するのだが、今少しく外交を徹底的にやつてもらいたい、何となれば彼支那人は從來の例によるも何時でも最後通牒を出さなければ又兵力に訴へねば解決せぬのが慣例である、これは一面彼等が國民に對する對面上の問題もあるが、溫和なる口舌では行かぬのである。時々は辛辣な談判が必要である、更に一段の奮鬪盡力あらん事を祈るのである。

次に軍人の外交につき研究して見ると、其職責上表面より外交をやらぬのは當然なことである。乍併軍人は其任務を果す爲、あらゆる手段方法を盡して支那の研究をする、先づ第一に支那駐在武官は領事館なり其分館のある所には必ず出してある、又外交官の居らぬ所迄も隨分派遣してある、而して軍の必要から支那の軍事は勿論、一般の地勢物資人物等の調査を行ひ、尙附隨として何でも國家的見地より、必要

な事は上司に報告する事にしてある、隨つて彼地の事情に通じ彼地の人物に接するのである。

支那人は外交官より日本軍人

然るに戰國支那の情態として、軍閥相互に戰爭する場合に於て、自己の能力の不足する時、日本に依賴するものとせば、日本外交官といふよりも寧ろ軍人である、何となれば軍人の智惠を借りる時は勝利を得る事となるのである。故に先づ軍人顧問を招聘し、且特務機關其他駐在武官乃至軍衙にたよるのである、即日本軍人は外交を行はんとするに非ずして外交を強いらるるのである、故に陰然第二の外交官の樣なものである、故に余は是等の軍人に望むのである、宜しく彼の急所を捉へ、單に支那の內政には干與せずと標榜するのみならず、出兵迄して置いて出兵は只日本軍部の都合なりと斷ぜず、此機會に彼に與ふる利害を判斷し、我外交官と有無相通ずるの明敏がなくつてはならぬ今回面談せし某高級外交官に於ても、軍部があまりに事を秘密にする

陰然たる外交官

有無相通の明敏

連繫不充分

が故に、又あまりに單純に行ふが故に、外交上大に差支を生ずるといふ事を耳にした、矢張り連繫が不充分らしい、しかし軍人の支那事情の調査は眞に徹底的にして、或點に於ては外交官以上の綿密なるものがある、所謂身命を賭して迄支那の實情を調査せるの賜である。又相互の連絡はこれ亦迅速周到なるのは結構である、但し堅氣の一徹として自己判斷に陷る事なきを保し難しと思ふのである、幸に自重自愛邦家の爲益々奮勵努力、外交官の外交に對し陰に陽に補助鞭撻(ベンタツ)する所あらば邦家の爲誠に幸である。

身命を賭して調査

七、支那に於ける軍事顧問

軍事顧問の研究

余は從來支那に於ける軍事顧問の頗る多きを斗にし、是等顧問諸君が果して如何なる業務に從事し、殊に我國家に對して幾何の貢献を與ふるや否やに關しては、可なりの興味を以て研究せり。幸今回の旅行に際しては、序論に述べたるが如く坂西大總統顧問を始め、多數の顧問、其他特務機關、支那駐在武官等に接し大に之が研究を重ねることを得たり。今左に顧問の招聘所屬の概要を述べ參考に資する事とする

大總統府顧問

『北京政府の顧問』

大總統府（國務總理）

張作霖顧問

『張作霖顧問』

（主として張學良）

坂西中將	（現役）	
多田砲兵中佐	（現役）	
松井陸軍少將	（現役）	
儀我歩兵少佐	（現役）	
濱面中將	（豫后備役）	
是永騎兵中佐	（豫后備役）	
濱本歩兵少佐	（豫后備役）	
酒井歩兵少佐	（豫后備役）	
松井砲兵中佐	（豫后備役）	
佐藤砲兵大佐	（豫后備役）	
明石砲兵大佐	（豫后備役）	
山内技師	（豫后備役）（福島縣選出代議士）	
町野大佐		

張宗昌顧問

『張宗昌顧問』

（一時吳俊陞附屬）		
（一時李景林附屬）		
（一時李景林附屬）		
（兵工廠某部技師長）		
（兵工廠某部技師長）		
（兵工廠某部技師長）		
（某部技師）		
（政治顧問）		
小野中佐	（現役）	（外將校數名）

吳佩孚顧問

『吳佩孚顧問』

坂西海軍大佐	（豫后備役）	（外數名）

孫傳芳顧問　『孫傳芳顧問』　岡村歩兵中佐（現役）（外數名）

馮玉祥顧問　『馮玉祥顧問』　松室少佐（現役）（外數名）

顧問二十數名

如斯顧問の重なるものを擧ぐると、現役約十名豫后備役十數名總計二十數名もあり、其他無名の顧問に至りては尙多數ある筈である。

偖是等の顧問は常に大體に於て自己の所屬せる人物（例へば張作霖とか吳佩孚とかいふ者）の爲に、顧問役を勤むるといふ事は當然であるから、支那軍閥が相互に戰爭する場合には、お互に敵味方となりて策を帷幄（イアク）に運らす事となるのである、例へば第二奉直戰では左の如くであつたかと察する。

第二奉直戰

奉天軍（張作霖側）

總司令部　濱面中將

某　軍　儀我少佐

某　軍　是永中佐

某　軍　濱本少佐

直隷軍（曹錕、吳佩孚側）　坂西大佐（外數名）

國民軍攻擊

大總統顧問坂西中將も時の曹錕政府の關係上、當然相談を受けた事と信ずる。今回の國民軍の攻擊に際しては奉天軍（張學良）には儀我少佐顧問役となり、黑龍軍（吳俊陞）には是永中佐顧問役となり、直魯聯軍（張宗昌、褚玉璞（チヨギヨク））には小野中佐が顧問役を務めた筈である。即是等の三名の顧問が大に相談して作戰を計畫したる事と信ずる。殊に○○中佐の如きは曩に張郭戰で騎兵の大迂回に効を奏し、今回はバインタ

○○中佐の奇効か